山びこ通信

Disce libens.

2011 春

山の学校
クラス紹介

本当の勉強――Age quod agis.

文・山下太郎

好きなことをとことんやる。そこから何か別の道が開けてくる。好きなこととの出会い、自分の生きる道との遭遇。日本語ではこういったこともすべて含めて「ご縁」と呼ぶ。表題のラテン語は、「できることをせよ」というのが直訳だが、授かった「ご縁」を大事にして目の前のことに全力を尽くせ、という意味で解釈したい。

今回の大震災で漁船を失った漁師は数知れない。その一人が日々の心情をブログに綴っていた。漁師をやめようかと何度も思った。そんな彼に希望の光が差した。ブログを見た他府県の漁師から中古船の譲渡を提案するメールが届いたのだ。TV の取材の中で、彼はこうつぶやいていた。「これからも目の前のことを一つ一つやるだけです」と。この言葉は、表題の言葉の意味を余す所なく伝えている。

「できることをする」。ただそれだけのことのようだが、「できる」と言えるためには無数の条件が満たされねばならない。このことを、今回の天災を通してあらためて教えられた気がする。「できる」の意味を考えれば、自分は何に全力を尽くすべきか、心の深いところで自問自答が繰り返される。答えは容易に出ない。であれば、自分が「これは」と思えるもの、「好きなこと」を手がかりにして、そこから進んでいけばよいのではないか。

本来、誰の中にも本物の輝きがある。だが、磨かなければ表に出ない。自分にもそれが何か見えないままである。大人になるにつれ、努力を忌避し失敗を恐れる心が育つ。一方、「できる」ことへの感謝を忘れず「好きなこと」に磨きをかける限り、その取り組みは必ず人々の絆の中で生かされる。ひいては社会に、そして自分に輝きを与えるものとなる。モノの損失だけがもったいないのではない。各自が自分の意志で自分を練磨することなく、絶えず他からの働きかけで動かされるだけなら、それはモノ以上に大きな社会的損失である。

「ご縁」という言葉は「有り難い」という日本語とつながっている。実際、無数の条件の上に自分の「学び」は成り立っているが、日頃はそれに気づかない。日本には水や空気のように学びの機会が横溢しているのだから。日本語で「勉強ができる」と言えば、普通は「学校の成績がよいこと」を意味する。社会人に関して「仕事ができる人」といったフレーズもよく聞かれる。しかし、これらの表現を英語に直訳しても、日本語の意味をそのまま伝えることはできない。映画の字幕に I can study! I can work! という台詞があれば、己の幸運に感謝する人間の姿を想像する。

とかく「成績」で評価される日常が目の前にある。多くの人が他人と比べられ、尻を叩かれている。うまくいかないことが続けば、きっと何かのせいにしたくなる。だが、震災ですべてを失った人々のことを思えば、みんな言い訳に過ぎないことに気づく。運が悪いのではなく、本当は運にとても恵まれているのだ。ただチャンスを生かしきれていないだけなのだ。こう気づくとき、猛然と本当の勉強が始まるのではないだろうか。狭い世界の中で他者と競わされる道でなく、世のため人のために己の命を生かす本当の勉強が。

（北白川幼稚園長・山の学校代表　山下太郎）

ホームページ http://www.kitashirakawa.jp/yama.html　ウェブログ http://www.kitashirakawa.jp/yama/
電話 781-3215 / FAX 781-6073　電子メール taro@kitashirakawa.jp

漢文入門

（月曜日 17:10～18:30　担当・木村亮太）

前号の「やまびこ通信」（2010 - 2011 冬）で、「開講可能クラスのご紹介」の欄に次のように書きました。

> 漢文訓読の基礎を学ぶクラスです。詩、伝記、議論文など、様々な文体に挑戦しながら、訓読の方法をしっかり身につけていきましょう。

開講まで少し時間が空いていることもあり、あまり早くから内容を決めつけ過ぎない方がいいかと思いながら書いたので、少しぼんやりした言い方になっています。この紹介文でどれだけの方が興味をもってくださったか分かりませんが、書いたことが嘘になってはいけませんから、以来、なにかいい方法はないかと考えつづけてきました。頭のなかを整理して、みなさんにお話ししましょう。

ある人は漢詩の世界に遊びたがっていて、ある人は『三国志』が読みたいと言い、ある人は儒家の教えに興味があるかも知れません。みなさんは、この 3 人の学ぶべきことは似ていると思いますか。それとも、違っていると思いますか。私の答えは、似ているところも、違っているところもある、という意地悪なものです。

杜甫の詩を味わうには、新緑にすがすがしさを覚え、遠くに暮らす友人を気にかける心の豊かさが大切です。劉備や孔明たちは、見たこともない土地を駆けまわり、聞いたこともない役職に就いています。孔子はときに変わったことを言い出しますが、素直に「はい」と従ってください。口答えをしてはいけません。これが違っているところです。

似ているところは、（もうお気づきかも知れませんが、）やはりどれも漢文だということです。そして、漢詩、歴史書、思想書、どの種類の漢文を読むのにも必要なのが、訓読という方法です。

訓読とはなにかと言えば、中国語の規則をひとつひとつ日本語の規則に置き換えて読むやり方のことです。この方法はとても良くできているので、ほとんどどのような文章にも対応することができます。訓読を身につけることは決して容易なことではありません。ですが、どんな規則でも数には限りがありますから、途中まで憶えてしまえば、あとは応用の繰り返しでどうにかなるものです。もっと難しいのは、夏の夕陽の鮮やかさに驚いたり、知らない人の名前をとことんまで調べたり、母親にとっての孝行息子でいることの方です。

漢文訓読のなかで使われることばは、当然のことながら私たちの日常の言語ではありません。では、古代の人にとってはどうだったのでしょうか。平安時代の貴族も、江戸時代の武士も、漢文を読むのはとても得意でしたが、彼らも漢文訓読のような日本語で家族や同僚と話していたわけではありません。漢籍を読むときや、自分で漢詩を作るときなどに、訓読の知識を活かしていたに過ぎないのです。最初は苦労して勉強したはずです。

私たちが漢文訓読を学習することは、あるいは古代の人たちの営みを再現することと言えるのかも知れません。

（文責　木村亮太）

新しい講師の紹介

今年度から山の学校に着任した新しい先生をご紹介します。

武田宙也（たけだ ひろなり）
京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了
現在、京都大学研究員・京都造形芸術大学非常勤講師

木村亮太（きむら りょうた）
京都大学大学院文学研究科・中国哲学史専修・博士後期課程
（七月まで中国・山東大学に留学中）

開講可能クラスの紹介

＊他にもご希望のクラスがございましたら、
お気軽にお問い合わせ下さい。

『確率・統計の考え方』
対象：中学生以上　講師：浅野直樹

一般にデータから価値を汲み取ろうとする際には唯一の正解というものはありません。確率・統計に騙されず、正しく考えるための思考法の訓練を共にすることができればと思います。

『ロシア語講読』 対象：一般　講師：山下大吾

プーシキンなど 19 世紀ロシアの古典作家の作品を中心に、受講生と相談の上テクストを選択します。初めてロシア語を学ばれる、あるいは再挑戦される方々を対象にした入門コースも開設予定です。

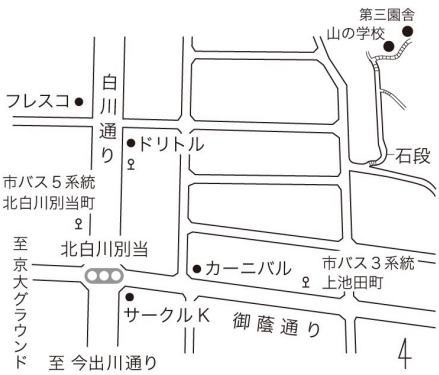
秋学期・時間割（予定）

	午前（9:10–15:30）	1（16:20–17:20）	2（17:30–18:30）	3（18:40–20:00）	4（20:10–21:30）
月		つくる （16:30～18:00 隔週）	漢文入門 （17:10～18:30）	イタリア語講読	高校英語 ラテン語入門
火		しぜん A* かいが A* （*15:50～17:20 隔週） かず1～2年	ことば3～4年 A かず5年	中学ことば ギリシャ語入門 A	中1～2英語の基本 ギリシャ語初級講読
水	経済学入門 （15:30～16:50）	ことば1～2年 かず4年 A	ことば3～4年 B かず4年 B	かず6年 中3英語の基本 古文講読（高・一般）	中学数学 歴史入門（高校） ラテン語初級講読 A
木	英語一般 （14:10～15:30） フランス語入門 （10:40～12:00） ラテン語初級講読 B （14:10～15:30）	しぜん B* かいが B* （*15:50～17:20 隔週） ことば6年	ウェブプログラミング入門 （17:10～18:30 隔週）	英語の基本（中学・高校）	高校数学 ラテン語初級文法
金		ことば3～4年 C ことば5年	かず3年 A かず3年 B	ロボット工作（隔週） ユークリッド幾何（隔週） ギリシャ語中級講読	調査研究入門（隔週） ラテン語初級講読 C ラテン語中級講読
土	フランス語講読 （9:10～12:00 隔週） ギリシャ語入門 B （14:00～17:00 隔週）				

山の学校 会員募集中。

山の学校は、**小学生から大人**を対象とした新しい学びの場です。“Disce libens.（楽しく学べ）”がモットーです。中高生のための徹底した少人数指導のクラス、社会人のための語学クラスも充実。子どもは大人のように真剣に、大人は子どものように童心に戻って学びの時を過ごします。

http://www.kitashirakawa.jp/yama-no-gakko



学校法人 北白川学園 山の学校／北白川幼稚園
〒606-8273 京都市左京区北白川山ノ元町 41

「かいが」 A・B　　担当　梁川健哲（けんてつ）　高木彬

● 赤と青と黄でえがく （A・B）

春学期の最初のクラスは、初めて顔を合わせる仲間同士の自己紹介を兼ねて、自由主題での制作を例年行ってきました。ただし今回は、「赤・青・黄」の絵の具のみを使うという制限を設けました。「3色しか使ってはいけないなんて、意地悪に思うでしょうか？それとも、面白いことをやってみせよう！と思うでしょうか？」みんなに問いかけてみました。クラスで一緒に2年間を過ごしてきた生徒が、きらりと目を光らせて笑みを浮かべ、後者の問いに「うんうん」と頷いてくれました。このように、山の学校かいがクラスでは、様々な「課題制作」を中心に展開してゆきます。画材や技法、描く対象などについて、一定の制約がある中、いかに豊かな工夫を行い、可能性を見出してゆくか。「約束された出来栄え」よりも、「方法を模索するプロセス」が大事です。まずは考えたとおり、思いきって、どんどん試してみましょう！

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

⑪

⑫

①記憶の断片のようなH君の詩的な世界。/ ②意図的に原色を生かしたOMちゃん。座敷空間に、茶碗と団子。③何色も色を作り、慎重に選んで描いたSaちゃんの花（制作中）。/ ④KM作。深みのある青と筆跡が海のうねりを感じさせます。/ ⑥YH作。よく見ると、金魚と一緒に苺の泳ぐ姿が。葡萄の下にも1匹隠れています。/ ⑦.⑧順にII、Su作。仲良くそれぞれが考えたお菓子の家を描きました。甘い香りがしてきます。⑨無意識の世界を覗き込んだようなK君の作品。/ ⑩背景に青を置いて、先に描いた果物を浮かび上がらせました。/ ⑪Y君は図鑑を見ながら描きたい昆虫を選ぶのに1時間以上かけました。大胆な彩色を施したゾウムシ。/ ⑫T作。余白による「引き」が、夢の中のような風景に一層不思議さを与えています。

試し塗りの紙。探求の過程に光るそれぞれの個性。

Aクラスでは上記制作の次の回、同様の3色の条件で筍を描く課題を行いました。さっきまで小雨を浴びていた筍たち。描く前に、みんなで皮を剥いたり、においを嗅いだり、切って断面を観察したりして、より深く質感を覚えます。眼前にある筍の色を目指して混色の模索が始まりました。その眼差しは、真剣そのものです。

（文責　梁川健哲）

SH

OM

YH

Sa

OI

● ２７枚の絵を撮ろう！ （Ｂクラスの場合）

今年度からかいがクラスＢを梁川先生と共担させていただく高木です。実は一昨年度にも担当させていただいていたので、今回は「復帰」です。これからも、どうぞよろしくお願いします。

春学期の後半では、絵筆をいっさい使わず、インスタント・カメラ（２７枚撮り）を使って、「２７枚の絵」を描いてもらいました。…え？　いったいどういうこと？　そう思われることでしょう。これは、「絵をいかに描くか」ということをいつもより意識するための取り組みなのです。たとえば、花を撮ることを考えてみましょう。その花を近くから撮るのがいいのか、遠くから撮るのがいいのか、どの角度から撮るのがいいのか、四角い画面のどのあたりに配置して撮るのがいいのか、あるいは画面からはみだしたほうがいいのか、何かとあわせて撮るのがいいのか、その場合どういう組み合わせがいいのか、などの違いによって、同じ花にも無限の表情が生まれることになります。ここで、この「撮る」を「描く」と読み替えてみてください。よくカメラマンが「いい絵を撮る」と言うように、写真と絵には、本質的な共通点があります。何かを描こうと思うとき、ちょっと立ち止まり、その描きたいものとじっくり向き合って、「どんなふうに」描きたいかという構想を画用紙に焼き付けること。これは絵を描くのにとても大事なプロセスです。今回はこの構図の感覚を体得するために、あえてそこに焦点を絞りやすいカメラを利用しました。どうすればモチーフをいちばんよく切り取れるかを考えながら、これで一枚の絵が生まれるんだ、という重みを持って、２７のシャッターを切りました。

ひろがる街と空が、こんな小さな窓のなかに。どうおさめよう？
みんなで似た位置から撮っても、同じ構図はありませんでした。

ネコ発見！　動くモチーフはとらえるのがむずかしい。
「あっ、うしろ向いちゃった」とＫ君。

Ｒちゃんが、見つけた木と向き合っています。ファインダーをしっかりのぞいて、構図を決めて。静かで、豊かな時間。（右）

Ｙ君はダンゴムシを画面一杯にとらえようと、体をかがめています。一生懸命さが伝わってきます。左下の写真では、すべり台の鉄の編目パターンが画面全体に広がって、おもしろい絵が撮れました。

「ここから京都タワーが見えるよ！」　「ほんとだ！」

別の日に、撮った絵をずらっと並べて、振り返りました。

みんなの撮ったネコを並べると、同じネコでも、ネコだけを近くからとらえたのと、奥のタケノコと一緒にとらえたのと、遠くの街の風景と一緒に切り取ったのとでは、印象がぜんぜんちがいますね。ネコが何を考えているのかまで、ちがっているように見えます。

さて、この取り組みには、実はもう一つの目的がありました。それは、写真にはできないこと、絵ならできることを知るということです。対象をそのまま写し取る写真に比べて、絵なら自由にそこから除いたり、加えたり、変形させたりできます。次回は、自分の選んだ写真を、本物の絵へと昇華させよう！

（文責　高木彬）

「最初に撮った街と空の風景、みんなのを見比べてみると、何かちがいに気づかない？」―「こっちの方が木がたくさんある」「こっちには電線がない」。「そうですね。あと、空と街のバランスはどう？」―「こっちの方が見上げてる感じかな」。対話はつきません。

「しぜん」 A・B　　担当　梁川健哲（けんてつ）　高木彬

●　「感じる」を、「知る」の一歩めに

しぜんクラスでは、からだ中の感覚をはたらかせて、身近な自然をありのまま「感じること」を何より大切にしています。「感じるとはどういうことか」とAクラスのみんなに訊ねると、いわゆる「五感」のうち、「見る（視覚）」は最後までなかなか出てきませんでした。「感じる」のうち、「見て感じる」ということが普段もっとも多く、何気ないことだからなのでしょう。クラスでは、更に注意深く見る体験を、そして、忘れられがちなそれ以外の感覚―聴く、触る、嗅ぐ、味わうを研ぎ澄ませる体験を積んでもらいたいと思っています。

更に、そうして体に吸い込んだ感覚や、発見したことを、「あらわし、伝え合う」ことで、驚きや喜びを増幅させ、心にどんどんと蓄えていって欲しいと願っています。

・発見を５つあらわそう（A）

初回はその手始めに、一人５つの発見を記録することを目標に、教室の外へ出ました。５つを達成した人は、また次の５つを目標にし、この日は一人10個あまりの発見を記すことができました。そして、2週間が経った次のクラスでは、前回との変化に気をつけながら、再び周辺を散策しました。

「もくれんのつぼみは
かたくてやわらかい（ＨＹ）」
「ひるなのにお月さまが見えた（M）」
「えだの先がまるまった木があった。
木に木がぐるぐるまきついていた。（H）」
「とくちょうは あかい３センチくらい
の葉がすごくつるつるしていた（N）」
発見は、他にもまだまだ・・・。

「この毛みたいの、おもしろい！」

2週間前には
無かったもみ
じの花！

「わあ、鉛筆がこんなに深く入る！」
黒い羽虫の巣を調べるＨＹ君。

よく見かけた白い
花（Ｎちゃん画）。
教室に戻って図鑑
を調べ、名前が
「シャガ」だと分
かりました！

図鑑にも見あ
たらなかった
黒い幼虫。

「こんなところにも！」

アスレチックのすき間を覗くＮちゃん。至る所で見つけた「まるまった草」がシダであることを、この日みんなで突きとめたのでした。「あの小さなグルグルが、ひらくとなぜあんなに大きくなるのか調べたいです。（Ｈ君記）」本当に不思議ですね。

・五感で味わう旬の筍（A）

Aクラスでは、筍採りもしました。みんなで皮を剥き、色や手触りを確かめ、香りを嗅ぎ、そして茹でます。茹でている間は、しぜん日記の発表や、Nちゃんが持ってきた鳥の巣の観察、ナナフシの子どもの観察、雨にまつわる言葉探しなどしているうちに、自ずと様々な議論へ展開してゆきました。「雨が降るのは雲があるからだよ」「海があるからじゃない？」「地球がどうやってできたかというとね…」「脳と心臓はどちらが大切なんだろう」「生きているって、どういうこと？」「いきをしているということじゃないかな…」（全て、生徒の言葉）。

さて、筍が茹で上がりました。その味は…？皆さんの表情からご想像下さい。　　（文責　梁川健哲）

●　葉っぱをさがそう、感じよう！（B）

今年度からしぜんクラスBを梁川先生と共担させていただく高木です。実は一昨年度にも担当させていただいていたので、今回は「復帰」です。これからも、どうぞよろしくお願いします。

さて、春学期の後半は、みんなで葉っぱ集めをしました。これは、「感じる発見」の、続編です。あのとき、葉っぱを発見してくれた仲間がたくさんいましたね。やわらかい葉っぱ、裏がぶつぶつの葉っぱ、細長い葉っぱ、くるっと巻いた葉っぱ…。今回は、この「葉っぱ」にスポットを当てて、じゃあ葉っぱには一体どんな形のものがあるか、手触りのものがあるか、香りのものがあるか、みんなで手分けして集めてみよう、ということになりました。「集めた葉っぱを、大きな表に並べてみよう！　そうすると、普段見るのとは違った、『感じかた』で分類した、このクラスだけの大図鑑ができる」。すると、みんなは「楽しそう！　はやくさがしたい！」と。さっそく、新緑のお山にとびだしました。

「この葉っぱ、やわらかいし、しかもギザギザしてる」（Rちゃん）　よく見て、よく感じていますね。においはどうかな？　「なんか、うらのほうがスースーするにおい」

「ねえ、コケって葉っぱ？」（Y君）　目のつけどころが面白いです！　どう思う？　「ちいさい葉っぱの集まりかな〜」　なるほど、よく見ればこれって葉っぱかもしれません。「これ、とってもいい？」　うん、少しだけなら。そっとね。

「うわ！　やわらかい！」（K君）
「ほんとだ、ふわふわしてる」（Yちゃん）
下のほうの葉はどうかな？　「こっちよりはかたい」（K君）　不思議だね。なんでこの先のほうだけやわらかいのかな？

M君は、大きい葉っぱ係になったようです。「こんな大きいの見つけたで！」（M君）と、見せにきてくれます。しばらくすると、大きい葉っぱがたくさん増えていました。「もうふくろに入りきれへんわ！」と、うれしそう。

てんぐの
葉っぱだ！

これも
ふわふわ！

おもしろい葉っぱを見つけましたね！　いったい、どこまでが葉っぱなのでしょうか？　全体？　それともこの小さな針みたいなところ？Rちゃんは、すこし長めに採集しています。

「ほら見て！」（Yちゃん、K君）　うわぁ、ちいさい葉っぱをよく発見しましたね。みんな「葉っぱを見つける目」になっています。すごい！

「こんなに細い葉っぱがあるよ！」（Y君）
葉っぱの形にも、本当にいろいろありますね。「ねえ、これ、たてにすじが入ってるよ？」本当ですね。ほかの葉っぱとは、すじの入りかたが違うみたいです。

「これはこの辺かな…」

だいぶならんできました。

葉を持ち帰ってからは、分類をはじめました。まず、集めた葉っぱに説明書きをそえます。自分の名前、この葉っぱの手触りや香り、形などを、そこに書きこみました。そして、みんなのぶんの葉っぱを集めて、いざ分類！「じゃあ、大きいのはこっちね！」「ギザギザが上で、まるいのは下！」さあ、どんな図鑑が完成するでしょうか。この記事をお読みの頃には、すでに完成していることでしょう！

（文責　高木彬）

いろんなイロとカタチの葉っぱたち。
いっぱい集めたね！

「これは中くらいですね！」と、“カタチの先生”ことRちゃん。

『つくる』（月 16:30～18:00）　担当 福西亮馬

『経験は最良の先生』――自分を進化させよう！

（クラスはこんな感じでにぎやかです）

（ロボットの構想を語るＨ君）

新しく始まった「つくる」クラス。集まってくれた六人の生徒は、学年の違いこそあれ、みな共通の接点があります。それは、「工作するのが好きなこと！」

今学期は、「がらくた工作」（ロボット＆宇宙船作り）と、「わりばし鉄砲」を作りました。がらくた工作のレポートは山の学校のブログにありますので、そちらをご覧ください。今回はわりばし鉄砲についてお伝えします。

（弓矢を作るＳちゃん）

（輪ゴムで次々とわりばしをとめていきます）

（トリガーのゴムのかたさを調整するＹ君）

（ボンドの接着部分を万力で固定する作業が気に入った様子）

（ドリルでトリガーの部分に穴を開けるＴ君）

（いつの間にか並んで作業していることの多い、Ｔ君とI君）

（小さな部品でも、いま頭の中では「ああなって、こうなって…」と大事な設計図の一部をなしています。細かな部品ほど時間がかかることもしばしば）

「一丁完成！」嬉しそうなＳ君。

「こうするとね、うまくいくと思うよ」と教えているＩ君と、素直に教えを請うＨ君。

（I 君が発明したレバーつきボウガン。右手のレバーが工夫点で、丸印の箇所にゴムがかけられるようになっています。それをななめに倒すとカタパルト式にゴムがはずれ、ガイドにセットされた矢を押して、まっすぐ矢が飛び出します。実物を見るとかなりの感動です！）

最初は、トリガーに何の工夫も加えないオーソドックスなものから挑戦しました。それでも命中精度が高いので、わりばし鉄砲をはじめて作った生徒にはかなり驚きだったようです。また輪ゴムが飛ぶと、今までの苦労も吹き飛ぶようです。

接着方法には、輪ゴム、木工用ボンド、ホットボンドと何種類か試してみました。一つ完成すると、次は別のサイズでも作りたくなってきます。そして大小の「えもの」を二丁三丁とズボンの脇にさして得意に歩く様子は、今も昔と変わらないようです。大人はよく「童心に帰る」と言いますが、その元となる思い出が、わりばし鉄砲にはあるように感じます。

さて次はいよいよトリガーです。ここを改良すると、「オートマチック連射」ができます。今回は「ひねもす」の６ピンなどのジョイントを使ってみました。今はまだ作りかけですが、うまくいくかどうか楽しみです。

ちなみに単純な構造のわりばし鉄砲でも、ゴムのかけ方（「ストッパー」というアイデア）次第で、５連射まではできます。２～３年生たちは２連射がやっとでしたが、５年生のＩ君は実際に５連射をこなして得意気でした。ストッパーのゴムを引っかける部分もまた工夫の余地があります。

そのように一口に「わりばし」と言っても、実に奥の深いものがあります。凝り出すと到底１～２回の授業では極めきれません。

続いて、「弓矢」もまた面白い構造をしています。こちらは輪ゴムを「飛ばす」のではなく、それを「使って」矢を飛ばします。そこが工夫のしどころです。さっそく基本形が作れたＩ君は、それを独自の工夫でボウガンに作り変えていました。そして一度うまく飛んだ後も、いつでも人に成功の様子を見てもらえるようにと、何度も何度もテストを重ねていました。その表情からは、「自分がこのアイデアを思いついたんだ」という深い自信が見て取れました。

経験は最良の先生です。人間の先生はいつもそばにいるとは限りませんが、経験という先生は一生そばで助言してくれます。経験とはたくさん失敗することです。その失敗こそが宝です。人がもし「失敗だ」と言う時に、「いや、こうするとうまくいかないことが分かったんだ」と、失敗を迎えに行くぐらいの気持ちで取り組みましょう。モットーは、「失敗にめげない」自分自身を「つくる」ことです。

（文責　福西亮馬）

『ことば』１～２年生（水１限）　　担当　高木 彬

このクラスでは現在のところ、詩と日記、そして物語を素材にして、ことばに親しんでいます。今回は、詩の取り組みについてお伝えします。

読んだ詩は、谷川俊太郎さんの「ひみつのともだち」です。この詩は全部ひらがなです。また、みんなにも馴染みのある「五・七」のリズムです。読みやすい。しかし、その意味は、なかなか奥深いです。こういう詩です。（「／」は改行、「／／」は改連。）「みえたらえらい／ひみつのともだち／わたしだけのだいじなともだち／／すんでるところはしらないの／だけどよんだらすぐきてくれる／いつもおせんべかじってて／ときどきあくびもするのです／／すがたはぱんだそっくりで／ほわほわけがわがあったかい／なにをきいても「ふむふむ」といって／とおくのほうをながめてる／／よるねるまえにはなしをするの／こわいはなしにたのしいはなし／だれにもいえないひみつのはなし」。

最初のうちは、朗読に力点を置きました。まだ意味には触れません。ことばのリズムだけを感じることに集中します。生徒さん全員で声を合わせて朗読します。まず私が一行朗読して、その後にみんなが続く。慣れてきたら、一連（段落）で交替、全文で交替、と、スパンを長くしていきました。このとき意外に思い、また感心もしたのは、生徒さん達だけで読む時間が長くなればなるほど、うまくリズムがとれていたということです。しかしこれは当然と言えば当然なのかもしれません。たとえば歌を歌うにしても、プツプツと細ぎれに歌うのは案外むつかしいものです。クラスの全員で呼吸を合わせて繰り返し朗読できる、その協調性と集中力がすごいと思いました。そして、もっとすごいと思ったのは、朗読の声がだんだんと大きくなっていったことでした。読むたびに、声に自信が満ちていきます。ことばを通じて心がひとつになる瞬間を実感できました。

朗読と並行して、書き取りもしました。ここで大事にしたことは、早く書くことではなく、字を丁寧に書くことです。ＳちゃんとＫちゃんは、１年生ですが、すでにしっかりと美しい字を書いてくれていました。自分の小学校入学当時を振り返ると本当に感心するばかりなのですが、私が「すごいね」と言うと、「えー？　そんなん、書けるやんな？」「うん、書けるで」とお二人。字を書けることの喜びと自信が垣間見えるようでした。２年生のＲ君とＨちゃんとＴちゃんは、字を丁寧に書くのはもちろんのこと、名前を漢字で書くことを誇りにされているようでした。褒めると、本当に嬉しそうな顔をされました。字を書くとは本来、こんなにも喜びにあふれた行為だったのだと、私自身が教えられたような気持ちになりました。

このようにして時間が過ぎ、はじめてこの詩の意味に触れたのは、３度目の授業時間の終わり頃でした。どんな詩にも、こう読みなさい、という「正しい」意味があるわけではありません。むしろ、「ひみつのともだち」って、どんな「ともだち」のことだろう？　そう考えている時間に、意味があるのです。そこで、生徒さんにもそれぞれ、「わたしだけの」「ひみつのともだち」を想像してもらいました。そして、もとの詩に寄りそいながら、実際に詩を作ってもらいました。作品は、山の学校のブログに発表しましたので、ぜひご覧になってください。創作の第一歩です。これは、全員分をこちらでタイプし直し、『ことば１ー２年生版・ひみつのともだち』として記念の本にして、みんなにお渡ししました。やはり、自分の文章が形になるというのは嬉しいことのようです。しばらくその本をじっと眺めて、友達の作品を見比べて喜んでおられました。作ることは、表すこと。表すことは、作ること。自分が書いた作品で友達を喜ばせることができたという経験は、かならず自信となり、次の創作への原動力へとなるはずです。

次号の山びこ通信の記事では、いろいろな日記の取り組みや、読んでいる本などについてから、お伝えしていきたいと思います。

（文責　高木 彬）

『ことば』 3～4年生Ａ（火曜２限）　担当 岸本廣大

教師がいて、生徒がいる。教育という場で必然的に見られる光景ですが、そこに生じる関係は多様です。今号の山びこ通信では、このクラスで見られた生徒同士の関係に触れながら、春学期の取り組みについて紹介していきます。

このクラスは３年生と４年生が一人ずつ、計２名が受講されています。この二人が、漢字パズルに取り組み、E.T.シートン（今泉吉晴訳）『カランポーのオオカミ王ロボ』（福音館書店）を読み進めています。異なる学年の子供さんと共に学んでいることが鍵となります。

たいてい、生徒と先生の間に見られる関係は、教師から生徒が「教える」、そして生徒から先生に「答える」というものになります。それ自体は重要な関係なので、これを一方的に批判するわけではありませんが、それだけでは、両者とも（特に子供さんは）つまらないと感じる時もあるでしょう。

嬉しいことに、このクラスではそれ以外の関係がよく見られます。それが「教えあい」です。例えば、ある子供さんが漢字パズルの正解に気づき、もう一人の子供さんがまだ悩んでいるとき、前者が後者に対してヒントを出してくれます。そこから、悩んでいた子供さんが正解を得られたことが何度もありました。また、『オオカミ王ロボ』の音読では、難しい漢字でつまってしまうことがあります。初めは私が助け舟を出していましたが、音読を聴いているもう一人の子供さんが漢字の読みを教えてくれることが何度もありました。今では、読めない漢字につまっても、もう一人の子供さんから助け舟が出ないか、ワンテンポおいて確認してから、私が読みを教えるという流れになっています。

普通の感覚からすれば、以上の取り組みでは４年生が３年生に教えているように思えますが、必ずしもそうではありません。確かに、４年生の方が知識は豊富で、「教える」機会は多いですが、特に音読の読みでは、３年生が「教える」ことも多くあります。例えば、既出ゆえにルビが振られていない難しい漢字なら、以前の箇所を思い出すことで、学校で習う知識ではかなわずとも、教えることができます。ここに見られるのは、上級生から下級生へという一方的な関係ではなく、「教えあい」なのです。

加えて、「競いあい」という関係も、特に漢字を探すという課題で見られます。もちろん、４年生が有利ですが、３年生も負けまいと漢字の本をめくります。４年生も追いつかれまいと漢字字典を調べ始めるのです。同学年なら良くあるかもしれませんが、違う学年でこのような「競いあい」が行われることに、私も多少驚いています。

生徒が互いに「教えあい」、「競いあい」によって自主的に学んでいく。この二つの関係が、春学期のクラスを良い方向に導いてくれました。特に「教えあい」は、山の学校全体で行われています。基本として掲げている毎月の勉強会ではもちろんのこと、他のクラスでも同様でしょう。このクラスもそんな山の学校の「教えあい」の一形態なのです。

（文責　岸本廣大）

『ことば』 3～4年生Ｂ（水曜２限）　担当 高木 彬

このクラスでは、初回の自己紹介のときに漢字の話題になったのがきっかけで、現在、漢字作りをしています。

漢字の歴史は、そのまま漢字作りの歴史です。古代中国の、漢字がまだ絵と文字の判別がつかないようなころから、じつにさまざまな漢字が創案され、また忘れられてきました。かつて日本に漢字が伝来してからも、古くは「峠（とうげ）」や「辻（つじ）」、新しくは「鞄（かばん）」などのいわゆる国字が考案されています。明治になって人力車が発明されると、それまでの馬車などと区別するために「俥（くるま、じんりきしゃ）」という字が作られました。実はこの「俥」、同じ字体の別の意味を持つ漢字が中国にあるのを知らずに作られたものなのです。しかし、読み方や意味付けは新しい。この場合、これは国字と言わずに「国訓」と言うのだそうですが、要は、こうした歴史から汲み取れるのは、「漢字は生きている」ということです。人と人とを繋ぎながら、漢字は日々、人々の社会や思想を反映して変化しているのです。

しかし、こうして漢字が何千年をも生き続けてきたのは、それが奇を衒うことを目的として変化してきたからではなく、変わらないものを大事にしつつ、そこを足がかりとして変化してきたからです。たとえば、現在でも中国では、新しく元素が発見されたときには、「氩（アルゴン）」、「氡（ラドン）」、「鎶（アインスタニウム）」など、公的機関が新しい漢字を作って認定し、公に広めるのだそうですが、こうした漢字はすべて、紀元前１世紀にまとめられた許慎の『説文解字』の「六書（りくしょ）」という考え方に、今でも則っています。（ちなみにこの元素新漢字では、六書のうち、ほとんどが意符と音符をあわせる「形声」とい

う漢字創作法を用いています。）現在でも、過去に培われてきたものの上に、新しい漢字が作られ続けているのです。

では、なぜ変わらないものを大事にしないといけないのでしょうか。それは、漢字がコミュニケーションのツールだからです。だれもが納得できて、多くの人が共有できるようになって初めて、漢字は人々のあいだに生き続けていくことができます。ですから、これまでの漢字をまったく無視して作ったのでは、どんなに格好いい漢字を作るセンスがあっても、宝の持ち腐れです。新しい漢字を作るということは、すなわち、これまでの漢字を深く理解するということなのです。

漢字は今に生きるもの、だから自分たちで作ってもいいんだ。そしてそのためには、これまでの漢字をよく理解することが大切なんだ。こういうことをよく理解した上で、このクラスでは漢字作りに取り組んでもらっています。「どうせ作るなら、これまでの蓄積をきちんと踏まえて、千年後まで残る漢字を！」との意気込みです。

はじめの数週間は、自己紹介で一番好きだと言ってくれた漢字の成り立ちや、部首ごとの漢字の成り立ちの基礎を、それぞれ順を追って、みんなで話し合いながら学んでいきました。これがなかなか面白く、みんな積極的に議論を交してくれるので、1時間なんてあっという間でした。成り立ちを学んでいる間にも、次々と新しい漢字のアイデアが溢れてきて、これは、過去を学ぶことが創造へのエネルギーとなることの、何よりの証拠だと思いました。

現在は、このクラスで漢字字典を編むことを目標に、着々と新しい漢字を作っています。学んだ部首の意味を踏まえた名作が数多く生まれています。まだ途中経過ですが、その一例をご報告したいと思います。

T.K君	愻	読み：たきび 意味：草木を火でもやしたかたわらに人がいる	
Y.K君	夤	読み：らくらい 意味：神のおりたような雷の意味	
N.S君	愻	読み：やさし（い） 意味：人の心の光がやさしさ	
T.S君	軫	読み：バス 意味：車の中に人が多くいるから	
K.T ちゃん	擶	読み：せいでんき 意味：手とドアなどの取っ手に流れる青い雷	
H.H君	潞	読み：ちんぼつせん 意味：氵＋舟＋各 海の中を落ちる舟	

H.Hくんの「ちんぼつせん」とY.K君の「らくらい」には、いずれも「各」が含まれています。この「各」は、「夂」と「口」とからなり、「口」は神へ祈る祝詞を入れる器、「夂」は下向きの神の足跡です。つまりこれだけで、祈りによって神が降りて来る形になります。（ここに梯子（阝）を加えると「降」、落ち葉（・）や雫（氵）を加えると「落」になります。）「ちんぼつせん」や「らくらい」は、この「各」の由来やイメージをしっかりと踏まえた漢字になっています。また、この「らくらい」と、K.Tちゃんの「せいでんき」には、どちらも「申」の字が見えますが、これは、左右に光を屈折させている稲妻の象形です。これに「各」を加えれば、まさしく「らくらい」としか言いようがなく、また「扌」と「青」を加えれば、これも「せいでんき」としか言いようがないでしょう。過不足がなく、洗練されています。T.S君の「バス」やN.S君の「やさし（い）」、T.K君の「たきび」も、漢字の組み合わせと意味とがぴったりとはまっていて、非常にセンスを感じます。三人の漢字にはどれも「人」が入っています。「人」の「多」い「車」とは、「バス」を他の車と区別する特徴をよくつかんでいて、すぐにでも一般的な漢字として通用しそうです。また、「人」の「心」の「光」としてのN.S君の「やさし（い）」は、「人」に「憂」いではなく、喜びや安心を与えるものでしょう。「灬（火）」が「・」と「木」を焚く「たきび」は、「・」が寄りそっているぶん、「焚」よりも焚き火の本質をついていて秀逸です。

（文責　高木 彬）

『ことば』 3～4年生C（金曜１限）　担当 福西亮馬

『物語のあるクラス』

私がこのクラスの生徒たちの「ことば」を受け持つのは、今回が二度目です。最初は一年生の時でした。暗唱や漢字の書き取り、推理クイズに取り組んだことが懐かしいです。そして今また、「この漢字もう習ったし知ってる！」とか、「私が書いてあげようか？」と、以前なら背伸びしていたところを生徒たちが得意げに披露してくれるたびに、一年間の充実ぶりが連想されます。

さて、私がこのクラスは「面白い」と感じたことが一つあります。それは具体的には「漢字しりとり」をしていた時のことでした。

「漢字しりとり」というのは、前後で熟語になるように一字ずつ漢字を継ぎ足していくというものです。ただし、前と同じ漢字を使ったら「アウト」です。読み方は上下どちらからでも構いません。また字を分解して新しい漢字を取り出してもよいこととしています。たとえば、人→間→時→日（時－寺の結果）という具合です。

みんなでホワイトボードの前に立って、いざ開始。制限時間は一人一分。

最初は個人プレーを念頭に置いていたのですが、生徒たちは自分の番以外でも一緒になって考え、「ほら、ほら、あれ！」と候補を示してくれるので、いつの間にかその雰囲気は「協力プレー」になっていきました。

また、辞書も使えることにしていたのですが、よくよく考えると、３年生が一分以内に引くのには無理があります。しかしそれもいつの間にか、答を書く人以外が全員で辞書を引き始め、バックアップ体制ができあがっていったのでした。「『族』って何画？」「一、二、三…十一画！」「ない、ない。ない…あった！」「ほら、ここ見て！」というような会話が何度も繰り返されたのでした。「住持」「供出」「円規」など、大人でも知らなさそうな難しい言葉が飛び出しました。こうなると制限時間というものはあまり意味をなさず、思う存分調べてもらうようにしました。

また、「一」→「位」→「二」と、数漢字に単位を組み合わせることを思いついた生徒もいました。上下どちらからでも読めるというルールを逆手にとったわけです。こうすると、「三」→「面」→「四」→「倍」→「五」→「秒」→「六」→「行」→…と、飛躍的に記録が伸びていきました。しかも十で終わりかというと、「百、千、万、億」「上、中、下」という抜け目のなさです。

このアイデアに生徒たちは盛り上がり、私の方を見て「してやったり」という顔をしていました。そして百の大台に乗る「びっくり記録」が達成されました。

（一〇七漢字）

国、村、億、強、姫、教、民、稚、白、九、行、四、電、社、供、二、生、住、火、題、体、人、
語、上、円、弱、女、科、意、園、色、周、七、倍、気、長、出、番、先、持、山、名、育、数、
下、規、点、性、理、音、公、青、十、枚、五、分、細、口、茶、頭、物、登、前、児、学、
巻、模、千、男、王、楽、家、虫、冊、八、秒、三、糸、入、葉、一、動、場、日、童、習、
中、木、万、力、様、室、族、幼、百、時、六、面、車、会、子、位、活、所、曜、話、字、

（読みは上下どちらからでもよく、また下線は分解ルールによる）

一方、本読みでは、ねべりよん作『忘れものの森』（文研出版）を了読しました。最初は、間違わずに何行続けて読めるかという「ストップ読み」という方法で、交代しながら読んでいたのですが、ここでも「漢字しりとり」と似た展開が生じたことに驚きました。というのは、一人が読むのに詰まったり、間違えたりすると、他の誰かが正しい読みをその生徒に教えてくれるようになったからです。こうすると「何行続くか」という関心は、個人で刺激し合うよりも、みんなで共有する方が大きくなります。

そこで私からもルールの変更を２点ばかり伝えました。一つは「まる読み」（読点ごとの交代）に。もう一つは「３秒以内の訂正ならセーフ」です。もちろん読み間違いに気付かずに３秒が経過してしまったり、交代でどこから読むのかが分からずに３秒以上途切れてしまった場合には、残念ながら「アウト」です。

しかし、そうなると、さらにまた不思議な展開になりました。３０分という長丁場でも、誰かが間違うとすかさず、他の誰かが正しい読み方をなぞり、途切れた箇所を指差してくれるおかげで、アウトが一度も出なくなってしまったのでした。結局その状況は毎週のように続き、とうとう一冊を読み終えるに至ったのでした。まるでネットワーク型の朗読会だと思いました。ちなみにこの時の記録は１０２０読点でした。しかもあとで内容を質問をすると、もちろんのように答が返ってきて、頭の中にしっかりとストーリーが入っていることにも感心しました。

このようにクラス自体があたかも物語性を持っていることが、何とも「面白い！」と感じられたのでした。

（文責　福西亮馬）

『ことば』 5年生（金曜１限）　　担当 高木 彬

このクラスでは、昨年度に引き続き、物語の創作に取り組んでいます。現在は、Hちゃんとのマンツーマンです。毎回、最初に本を読んで、それから物語を書き進めています。このスタイルは昨年度と変わりません。ただ今年からは、本を読んだ後に、そこから創作のアイデアを汲み取るための時間も設けています。たとえば、春学期は斉藤洋の『どうぶつえんのいっしゅうかん』（この本はHちゃんがこのクラスに入ってこられる前にも一度読んだことがあります）を一話ずつ読み進めているのですが、第１話（「火曜日」）では、ラマとバクの面白い会話のかけあいから、「会話文」でどのようなことが表現できるかを考えました。次の第２話（「水曜日」）では、フラミンゴが言葉を繰り返す様子から、文の「リズム」と、そのリズムをわざと

崩す意味について考えました。第３話（「木曜日」）では、普段はつっけんどんに振舞いながらもここぞというときにライオンを助けるクロヒョウの性格から、物語における登場人物（動物）の「個性」の役割とその造型方法について触れました。第４話（「金曜日」）では、動物園で起こった出来事を伝えるハトの話から、いわゆる「伏線」について考えました。…と、こう書くと、なんだか難しいことのように聞こえますが、実際は、物語の本文に寄りそいながらゆっくりと進んでいるので、Hちゃんとかなりつっこんだ議論を交わすことができています。もちろん、こうした創作のアイデアは、「こうすべき」というルールではなく、自分なりに使うことのできる「持ち札」としてストックしておけばいいわけです。Hちゃんはすでに作家で、こうしたアイデアを、ごく実践的なテクニックとして血肉にしてくれているようです。

さて、Hちゃんは現在、『星の王子さま』という小説を執筆中です。主人公は、タイトルにもあるように「星の王子さま」です。実は彼は、昨年度の終わりごろに、ゲーム形式で登場人物作りに取り組んだ時に生まれた登場人物です。「この王子さまの話書く！」ということで、本作がスタートしました。ですので、おおまかなキャラクター設定はすでに決まっています。そして興味深いのは、この設定を考えていくときに、すでに物語が萌芽していた、ということです。星を作ることができる。その星を与えて人間の願いを叶えることができる。自分の故郷の星は水晶でできている。こうした設定には、すでにこれから書く物語のプロット（筋）が、おぼろげに刻まれています。物語とは、「人」から始まるのです。そこから、では一体どのように星を作るのか、どのように願いを叶えるのか、故郷の水晶の星はどのような風景か、という物語の豊かな細部を引き出すのが、面白いところです。Hちゃんは、登場人物の設定を詰めていくところからはじまり、きちんと構想を練ったうえで、物語を書き進めてくれています。もうすでにかなりの枚数を書いていますが、まだ主人公である星の王子さまは登場していません。王子さまが願いを叶えるべき人のことを、まず書く必要があるからです。「王子さま、まだ出てきてないで」と言うときのHちゃんは、どこか誇らしげです。自分はいま大作を書いているんだ、という自信と期待のあらわれだと思います。完成後は出版をしようね、と言い合っています。みなさま、その日が来るのを、どうぞお楽しみに！

（文責　高木 彬）

『ことば』 6年生（木曜１限）　　担当 福西亮馬

『一は百に通ず』

春学期は、キャサリン・ストーの児童書『ポリーとはらぺこオオカミ』（岩波書店）を了読しました。このクラスでは、「ストップ読み」「まる読み」（学校スタイルの読み方）からは自然と逸脱し、今では登場人物の声を演じる「なりきり読み」を楽しんでいます。これは気心の知れた女の子同士だからなのかもしれませんが、E ちゃんと M ちゃんは音読に対して前向きで、照れてもすぐにウキウキしている様子が見て取れます。

『ポリーとはらぺこオオカミ』は、おおかみの出てくる童話をパロディにした短編集で、はじけるように面白いです。これを選ぶにあたっては、去年『ことばの発表会』のために二人が物語を書いてくれたことが念頭にありました。というのは、童話は、設定や登場人物、結末を変えることで、創作するには持って来いの素材ですが、上記の本にはそうしたお手本となる要素が多々詰まっているからです。特に発表会では脚本を任された M ちゃんは、家に何度も原稿を持ち帰って書いてくれたことがまだ記憶に新しく、ぜひまたそうしたお話作りの栄養にしてほしいと思って選びました。年下の子供たちに読み聞かせることを思い描きながらの創作はきっと自信の一つになるでしょう。

さて、もう一つの取り組みとして、『百人一首』を覚えています。おチラシや坊主めくりは、お正月近くになると授業でもよくしていましたが、和歌自体にこの時期から親しむことは新しい試みです。これまでは、押しつけになることを恐れて、「むすめふさほせ」の歌の紹介などなかなか切り出せませんでした。ですが今では、生徒たちが積極的に興味を抱いていることを知り、また俳句の取り組みの下地もあることから、このクラスでは「百人一首で行こう」と決めたのでした。

そのきっかけとなったのは、E ちゃんがしている学校の自主勉強でした。E ちゃんがそれで百人一首を一生懸命書き写していると聞き、この間もそのノートを見せてもらって、大いに称揚しました。

一つのことを好きになれば、あとから他のことも好きになっていくものです。この間 M ちゃんがわざわ

ざ社会の教科書を持ってきて、「こんな和歌があったよ！」と、藤原道長の「この世をば…」の歌を示してくれました。また遷都の話や、「奈良の大仏を見に行きたい！」という希望も語り合いました。そこで歴史は好きなのかとたずねると、E ちゃんも M ちゃんも「好き！」と答えてくれました。こうした展開は嬉しい限りです。その二人が最初に覚えてくれたのが次の和歌です。

きみがためはるののにいでてわかなつむ	わがころもてにゆきはふりつつ	光孝天皇	（Eちゃん）
めぐりあひてみしやそれともわかぬまに	くもがくれにしよはのつきかな	紫式部	（Mちゃん）

ところで、山の学校のブログの記事を見返していると、去年百人一首をしたあとに「一首だけ覚える」という宿題を課したことがありました。その時二人が選んでくれたのがちょうど上の二首でした。今でもちゃんと意識の底でつながっていることを知り、大事にしたいものだと思いました。

百人一首は、現代風に言えば「マイ・ベスト・ソング 100」です。その第一番は、小倉百人一首（藤原定家撰）では天智天皇ですが、E ちゃんの私家版では光孝天皇であり、M ちゃんでは紫式部というわけです。またレパートリーを増やしていくことは、もし耳で覚えるのであれば、あたかも iPod にお気に入りの曲を選んで入れるように心楽しい作業のはずです。少なくともやっつけ仕事にしてしまうほど、もったいないことはありません。ぜひこれからも「増えていく」楽しみを味わっていきましょう。

実際、百人一首を覚えるコツは、一首でもいいので「得意札」を作ることです。そうすれば「少なくとも自分にはこれがある」という安心が働き、あとは覚えることにそう意識の負担はかかりません。三十、四十とすぐに覚えられるようになります。たった一枚に思える得意札が、実は百回、千回と自信を与え続けてくれるのです。

同じように、百人一首を「得意分野」にすることもまた、他の色々な興味にかかる「かけ橋」となってくれることでしょう。どんなことでも、「まずは一つ好きになること」からだと思います。

（文責 福西亮馬）

『かず』　1～2年、3年B、4年A、4年B、5年　（火1）（金2）（水1･水2）（火2）　担当　福西亮馬

『好きを支えるところから』

私が担当しているクラスでは、春学期はクラス作りも兼ねて、考える要素を持った数遊びや論理パズルを、チーム対チーム、または生徒対先生で取り組むことをしてきました。

１～２年生クラスでは、「いっせーのーで」という数当てゲームが人気を博しました。これは子供の頃に、私の親がよく一緒に遊んでくれたものです。

数人でプレーし、人数が多ければより白熱します。おはじきを０～４個、各々手の中に隠し持ち（チャージ）、「いっせーのーで」とそろえて出します。そして全員の手のおはじきの合計を言い当てた人が全部もらえるというルールです。また全員の予想がはずれたら、手のおはじきの一番少なかった人がみんなにペナルティを支払います。ですので、いつでもチャージを０枚にすることが得だとは限りません。

このゲームは、当たった時の喜びが大きいので、低学年の私は空想に衝き動かされて、つい夢中になりました。お風呂上りなど家族みんなの手が空いている時間を見つけては、「また、あれしよう！」と親にせがんだのを覚えています。

けれどもこのゲームの本当の楽しさは、数を言い当てることよりも、大人の様々なフェイントを見破ることにありました。１つしかチャージしていないのにわざと指の間からそれをのぞかせて「ほら、いっぱいある」とだましてみせたり、本当はたくさんあるのに固く握って「ないよ、ないよ」と振ってみせたり。こうしたアナログ的なものが、どこか懐かしい記憶として蘇ってきます。時にはわざとカチッと音をさせることもありました。こうすると、おはじきが１個で音がするはずがないので、２個以上という予想が成り立ちます。もっと大胆になると、一瞬だけぱっと手を開くこともありました。もちろん今ではそうしたやり取りのすべてが、子供の側が負けすぎないようにとの大人の配慮だったことを私も知っています。

さて実際クラスでもやってみると、生徒たちは「本当か嘘か」ということにすごく敏感でした。私のフェイントには、とことん疑いのまなざしを向けてきます。それでも私がニヤニヤしてうそぶいていると、ついには生徒たちの方から私の手を押しつかんで、総手で指をこじ開けようとしてきます。そして「あ、今１個見えた！」とか「こっちにも１個見えた！」など、だんだんテンションが上がっていきます。そうなると数当てからも算数からも逸脱してしまいますが、それがしかし、数を支える情緒であり、ベースなのだと思います。おそらく当時の記憶から紡ぎ出される「大人とのやり取り」の一つ一つが、学年が上がってから「算

数は好き？　嫌い？」と聞かれた時にも、積極的な答となって、こだましてくるのではないかと思います。
　今回の話は数当てゲームだけに絞りましたが、私が担当しているクラスでは共通して、上のような取り組みを学年に合わせた形でしています。

（文責　福西亮馬）

『かず』　３年生Ａ（金曜2限）　　担当　高木 彬

　このクラスは現在、４人の生徒さんが受講されています。ドリルを使って復習問題をひたすら解く時間、パズルやゲームで楽しみながら集中力や判断力を養う時間、そして、かずの意味を考える時間、毎回この三本柱で進めています。
　ドリルの時間は、いつも、心地良い緊張感に包まれています。姿勢を正して取り組んでおられます。各自で解いているドリルも違うので、他の誰かと比較する必要はありません。これまでたくさんの問題を解くことができたという自信に励まされながら、みんな昨日の自分に挑戦しています。たとえば、昨年度から数えて５冊目のドリルをクリアして表彰式を迎えたＩちゃんは、６冊目に、あえて問題数の多い大判のドリルを選びました。Miちゃんは、新しいドリルの１ページ目からパーフェクト・ペースで進んでおり、その記録を守るために、計算の確かめは怠りません。しかしながら、同時に、各々は自己完結して閉じているわけではありません。あい対しているのは自分自身であっても、そういう一生懸命な雰囲気をつくっているのは、クラスの全員だからです。お互いがお互いの頑張っている姿に感化されながら、自分の問題に全力投球できているというのが、このドリルの時間のみんなを見ていて、素晴らしいと思えるところです。
　このドリルの時間が３０分、そしてパズル・ゲームの時間とかずの意味を考える時間が、それぞれ１５分ずつです。パズルやゲームでは、週ごとに、おもに迷路やまちがいさがし、トランプなどをしています。迷路やまちがいさがしのほうでは、ときどき「うでだめし問題」にチャレンジしています。かなり難しい迷路も作っていったのですが、簡単なものから徐々に慣れていけば、最後にはみんなクリアすることができていました。最初に見せたときには「こんなむずかしいの、むりー」と言っていたものでも、頑張れば自力で解けるんだという経験を、これからも重ねていってほしいです。またトランプでは、「７ならべ」や「２９」をしています。「７ならべ」は実は奥が深いんだ、ということを、みんな最近だんだんとわかってきたようです。「６」と「８」の出し方、３回までのパスの使い方が、勝利のカギです。「２９」については耳慣れない方もいらっしゃると思います。手札を交替で出していって、場札の合計を２９に出来た人が勝ち、というゲームです。手札は、場札と足していくらになるか宣言しながら出さねばならず、知らない間にたくさん計算をしていることになります。自分のターンで２９にできるように予測・計算するのも、ちょっと頭を使います。こちらについても、かなり盛り上がっていますが、今のところはまだ、勝利は偶然性に大きく左右されているので、本当に面白いのはこれからです。
　あとの１５分は、かずの意味をみんなで考えています。これはどういう取り組みかというと、まず、数字をひとつ決めます。次に、その数字が意味する物事をかたっぱしからみんなに挙げてもらいます。そしてその物事の共通項を発見します。それが、その数字の意味です。たとえば、「２」を取り上げた日には、「目」、「手」、「眼鏡のレンズ」、「足」、「天使と悪魔」、「手ぶくろ」、「昼と夜」、などなど、ホワイトボードに膨大なリストができました。そこから、それぞれをまとめていくと、「人間の体」や「反対（一対）」という、この「２」という数字の意味が浮かび上がってきました。「じゃあ、『長いと短い』も入るやんな」とMoちゃん。その通りです。「『蝶の羽』！」と言ってくれたのはHちゃんでした。これもなかなか鋭いです。「２」は、人間の体だけではなくて、「動物の羽」をも意味しているのです。このようにして、毎週ひとつずつ数字の意味を考えています。５、１０、２０、と続けて、かずの大事典をつくろうと考えていることを伝えると、みんなかなり乗り気になってくれました。発見したかずを、事典に綴じるための用紙に、次々と書き足しておられました。こういう取り組みをしているのは、抽象的な記号であると同時に、具体的で身近な物質でもある、この「かず」というもの自体の魅力に興味をもてれば、との思いからです。行けるところまで行こうと思っています。

（文責　高木 彬）

『かず』 ６年生（水曜3限）　　担当　岸本廣大

このクラスの生徒さんは、とてもまじめで素直です。主に取り組んでいるドリルの計算問題も、現在の範囲に関しては基本をしっかり習得しており、一時間のうちに黙々と多くの問題をこなしてくれます。私が口を挟む余地もありません。正直、教える側が手持ち無沙汰なほどです。

そんな生徒さんたちも、さすがに完璧ではありません。惜しむらくは、計算ミスが比較的よく見られることです。計算ミスをなくす方法として、以前の山びこ通信（2010 年秋号）では「狡猾な計算の仕方」の取り組みを紹介しました。これによって複雑な計算を単純化できますが、ある生徒さんの「この時間帯は集中力がおちる」という発言から示唆されるように、単純な計算問題で計算ミスをしてしまうことが問題なのです。「狡猾な」方法で複雑な計算をいくら単純化しても、そのようなミスで全てが水泡に帰すのですから。

では、単純な計算ミスをなくす方法あるのでしょうか。基本が不十分ならば、基本を覚えなおすという対策を打てますが、集中力不足による計算ミスは根本的な対策を立てることさえ困難です。ここでは、生徒さん同様に単純な計算ミスによって何度も辛酸を舐めた私の経験に基づいて、いくつかの方法を提示しようと思います。

まずは、前もって概算することです。例えば「397×29」という計算ならば、先に「400×30」をしておくことで、おおよその答えが「12000」となることがわかります（正答は 11513）。数字の書き違えや繰り上がりのミスによって、大幅に答えが異なれば、計算ミスをしてしまったと気づくことができるのです。これは、小数点の位置を間違えやすい小数の計算に有効でしょう。「4.23×2.82」の場合、おおよそ「12」と概算していれば、「1.19286」とは決してならないとわかるはずです（正答は「11.9286」）。

しかし、概算による想定も完全ではありません。一の位の違いなどは誤差として見落としてしまうからです。そこで、最終手段として、計算を「丁寧に」書いて欲しいと思います。文章題などの計算はどうしても空いているスペースに小さく書いてしまいがちですが、小さく詰めて書くことによって、計算途中に数字を読み違えたり、位をずれたまま計算してしまうことがあるのです。計算を行う際は、できるだけ広いスペースに、丁寧に書くように常日頃から意識しておくことで、このような惜しいミスをなくすことができるでしょう。もし、そのようなスペースがないのなら計算用紙を使ってもかまいません。

単純な計算ミスとはいえ、それを繰り返すことで、算数や数学の考え方は好きでも、教科としてのそれらが嫌いになってしまう可能性があります。かく言う私がその実例です。それによって「かず」を忌避するのは、知的に伸びしろのある生徒さんには非常にもったいないことです。以上の方法は絶対ではありませんが、参考として生徒さん自身が計算ミスをなくす工夫をし、より「かず」を好きになってくれることを期待しています。

（文責 岸本廣大）

――「中学生・高校生」の部――

『中学・日本語の読み書き』（火曜３限）　担当 岸本廣大

中学生の「ことば」を担当するのは 2008 年度以来ですが、方針は当時から変わりません。すなわち、「読む」、「書く」、そして「議論する」ということです。春学期が半ばも過ぎた現在は、生徒さんが薦める作品（あるいはその一部）を皆で読み、要約したり、感想文を書いたり、時には内容について議論しています。

一方、春学期の前半は、まずは私が選んだ物語を読み、感想文を書いてもらいました。読んだ物語は新見南吉の『おぢいさんのランプ』です。貧しい生活を送っていた巳之助は、ランプと出会ってランプ屋となり、身を立てていきます。その後、電燈の台頭によって商売の危機を感じると、彼はついに狂気に至ります。しかし、あることをきっかけに自らの過ちに気づき、正気を取り戻すのです。以上の実体験を、おじいさん（巳之助）が孫の東一君に語るというのが、この物語のおおまかな内容です。

もともと童話集に収録されていたもので、内容は平易です。しかし、戦前に特有の表現など難しい部分もありました。また、内容自体が中学生にとって共感しづらいものだったかもしれません。しかし、今は面白いとは思わなくても、名作とされる物語を読み通すことは重要です。自分が好きな分野ならどんどん読み進めるでしょうが、そうでないものは等閑にしがちです。そこには、未知の表現がたくさん詰まっているというのに。それはとても惜しいことです。著者の新見南吉自身、童話集のあとがきで次のように述べています。「（内容は面白いので、難しいからといって放り出さず、家族に聞きながら読み通してくださいと述べた後）さうして最後までゆけば、君達は、こんな話きいて損しちやつた、とは、きつといはないだらうと思ひます。ひよつとすると、三月もたつてから、もういつぺん読んでみようといふ気が、起きてくるかもしれません。さうだといいのだがな、と私はひそかに思つてゐます。」あとからふと思い出す。そんな表現が生徒さんに

見つかったなら、この物語を読んだ価値はあるでしょう。
　また、皆で読み進めることで、見えなかった点が見えるようにもなりました。例えば、巳之助が正気に戻ったのは、狂気ゆえに放火を企んだ際、見当たらないマッチの代用として持ってきた火打石でなかなか火がつかないことに苛立ち、「古くせえもなあ」と悪態づいた瞬間でした。ここでは、「(旧) ランプ⇔電燈 (新)」と「(旧) 火打石⇔マッチ (新)」の対比があるのですが、私がその点に触れたとき、気づいていた生徒さんは一人だけでした。「新旧」という全体を貫くテーマであるだけに、その部分の理解が、最終的に物語全体の理解につながるほど重要です。その点に気づけたことは、皆で読み「議論」したことの効用でした。生徒さんの薦める作品でも、自分が気づかない点が見つかるかもしれないと思うと、春学期の後半も楽しみになってきます。
　なお、テキストは「青空文庫」(http://www.aozora.gr.jp/index.html) を利用しました。この場を借りて、感謝申し上げます。

(文責　岸本廣大)

『中1～2年英語の基本』(火曜４限)　担当 岸本廣大

　この中学英語のクラスは、去年から私と英語を学んでいた２年生が２名、新しく英語を学び始める１年生が２名、計４名からなります。今まで以上の人数と、１年生と２年生という混成クラスに若干の戸惑いはありました。それでも、できるだけ今まで通り、単語の確認と文法を中心に進めているところです。ただし、初めて教科としての英語に触れた１年生と、一年間英語を学んできた２年生との間には、大きな差があるのも事実です。その差をどう扱うか。その点が、このクラスを担当する際の悩みどころでした。
　混成クラスであっても、学年ごとに別々の課題に取り組んでもらうことはできます。その方式の利点は理解できますし、細かな文法事項についてはそうせざるを得ません。しかし、完全に分離してしまうのも考えものです。なぜなら、一つのクラスが実質二つのクラスとなり、私としては仕事量が二倍に、生徒さんにとってもせっかくのクラスの半分が自習のようになってしまうからです。これでは誰も得しません。そこで、今号の山びこ通信では、１年生と２年生が共同し、両者に有用となった取り組みを紹介したいと思います。
　一つは、会話表現です。簡単かつ使いやすい表現を CD で実際に聴いた後、自分でその表現を用いた文を考えてもらっています。その例としては、“I think ～.”、“I am happy ～.”などがありました。このとき、事実上英作文を行うわけですから、１年生にとってはかなりの難問です。しかし、２年生に英作文の手伝いをしてもらうことで、両方にとって有益な取り組みになります。１年生は、文法的には不正確であっても、様々な表現に触れることができ、他方で２年生は英作文の手伝いを通して、英語の基礎を確認できます。また、２年生は上級生としての「プライド」を（良い意味で）保つために、自ら一生懸命に頭を働かせたことでしょう。
　もう一つは､英単語で行ったしりとりです｡もちろん､これも英単語を多く知っている２年生が有利です。しかし、１年生は辞書を使用し、２年生はできるだけ覚えているものに限るというルールを追加すれば、立場は対等になります。２年生にとっては単語の復習になり、１年生にとっては辞書を引く練習になるという点で、これも両者にとって有用な取り組みになりました。二週に渡って 50 以上の単語を連ねることができたのは、その成果を示しています。このしりとりは、生徒さんにも予想以上に好評で、１年生が成長したときに改めてやってみたいと考えています。
　はじめは手探りでしたが、いろいろと取り組むうちに、学年の異なる混成クラスでも、やり方次第では両者の学習にとって有用なものになることを実感できました。一方で、個別の課題への取り組みとのバランスが崩れがちになった点は反省点でしょう｡今後も混成クラスだからできることと個々の英語学習の能力を高めることの両立を目標に、様々な取り組みを行っていくつもりです。

(文責　岸本廣大)

『中３英語の基本』(水曜３限)　担当 浅野直樹

　生徒たちの進級に伴いクラス名が「中３英語の基本」になりました。中身もそれに相応しく発展してきています。その中でも今回はある一人の生徒の発展の様子をたどります。
　ここでは仮に S さんとします。なぜその生徒を取り上げようと思ったのかというと、中１の終わりに英語がほとんどできなかった状態から、中３の始めの今では英語がかなりできる状態になったからです。そのことが何よりも本人の様子に表れています｡最初は自信なさげだったのが今では自信にあふれているように

私には感じられたのです。

中２の春の時点ではそもそも主語と動詞があるという英文の構造をあまり理解していないようでした。そうなると当然リスニングでも何が何だかわからないといった状況でした。ただ、そのような中でも、懸命に辞書を引いて決して弱音を吐かなかったという姿勢を今でもよく覚えています。いつも辞書を何度も引いて考え尽くしてから質問をしてくれました。

第一の転機は昨年の６月頃に訪れました。それまで何度も繰り返してきたbe動詞と一般動詞の違いが腑に落ちるという瞬間が訪れたのです。わからないときはいくら説明を聞いてもわからないものですが、わかるときは一瞬でわかります。もちろんそれまでにわからないなりに努力するという時期があったからこそそのひらめきの瞬間が訪れるわけですが。こうして一つのことがわかれば後はその応用です。be 動詞と一般動詞の区別は過去形でも同じように重要ですし、進行形は一般動詞に見せかけて実はbe動詞の文であると理解できます。

中２の秋学期が始まると、夏休みにあまり英語に触れていなかったためか、感覚が鈍っているようでした。この秋学期からはネイティブ向けの小話を読むという活動を始めたのですが、内容をつかむのが厳しい様子でした。やはりちょっと勉強しただけで英語がすらすらとわかるようになるほど甘くはありません。難しい英文はともかく、学校で習う英語には十分についていける水準に達していたので、to 不定詞などの事柄はしっかり理解を積み重ねていきました。学校と山の学校で角度を変えて同じ事柄を学習したのが理解を促進したのだと思います。当たり前のことながら、学校での学習が重要であることを再認識しました。引き続いて動名詞や比較なども着実にわかるようになっていきました。このあたりが第二の転機だったように思います。

それでもまだ文法がわかり辞書さえ引けばどうにかなるという段階です。次は英語に触れる絶対量を増やして、辞書がなくてもある程度はわかるというところに到達してもらいたいです。特に会話表現などはそのまま覚えたほうが手っ取り早いです。リスニングでもかなり意味をつかめていることから、今はこの山を越えつつあるかなというところです。その背景には自主的な学習による英語に触れる絶対量の増加があるのだと推測しております。

（文責　浅野直樹）

『高校英語』（月曜４限）　　担当 百木 漠

高校英語は、今年もS君とのマンツーマン授業でやることになりました。新学期からセンター試験対策の問題集を始めたのですが、今のところなかなか苦戦中です。ネックはやはり語彙力。単語と熟語、両方の知識がまだまだ不足しています。単語に関しては、昨年の秋ごろからずっと一冊の単語帳を使って、毎回授業の初めに簡単な単語テストを行っています。そのおかげもあって少しずつ語彙が増えてきた感触はあるのですが、その単語帳は基本単語が中心なので、少し難易度の高い単語や熟語になるとまだまだ対応できていません。単語力や熟語力に関しては、地道に覚えていくしかないので頑張ってほしいところです。

そのかわりに文法や長文読解に関してはかなり実力が付いてきたようです。とくに関係代名詞を含んだ構文の和訳を得意としているようです。関係代名詞を含んだ構文は長文問題でも頻出なので、この点は頼もしいところです。完了形、不定詞、動名詞、受動態、仮定法など、文法問題集の応用問題を順番に解いてもらっていますが、1年前に比べれば格段に進歩しています。しかし、やや応用的な文法問題にはまだ対応できていないので、今後は文法の応用問題をたくさん解くことも課題のひとつです。長文読解も苦手ではないようですが、まだ読むのにかなり時間がかかっていますし、内容の理解も不十分な場合が多いので、これから練習が必要です。

S君は高校3年生になってからかなり忙しい生活を送っているようです。毎日、授業が終わってからも、センター対策の補習や絵画実習があるとのこと。7月には文化祭、10月には作品展への出展があり、今から準備に取りかかっているそうです。土曜日にも補習やセンター模擬試験などがあるらしく、最近は少しお疲れ気味のときもありました。でもその分だけ非常に充実した高校生活を送っているようで、もう10年以上前に高校を卒業した身としては羨ましくもあります。なによりS君には日本絵画という学生生活をかけて打ち込めるものがあるのが素晴らしいです。僕も昨年S君が出展した作品展を見に行かせてもらいましたが、とても迫力のある、生命力のこもった作品でとても感心しました。今年は高校生活最後の作品展ということで、S君は今から意気込んでいるようなので、秋の作品展が楽しみです。勉強と絵画とを両立させつつ、良い結果を得ることができるよう、これからもS君をサポートしていければと考えています。

（文責　百木 漠）

『英語の基本(中学・高校)』(木曜３限)　担当　浅野直樹

このクラスでは中１の生徒と高３の生徒が同居することになりました。ちょうど日本の英語教育の入り口と出口を見ているような感じです。

先に出口のほうから考えます。英語の文法事項が一通りわかるというのが高校卒業時の状態です。6 年間も英語を勉強したのに英語をろくに話せないと言われたりしますが、英語を話す練習はその 6 年の間にほとんど行わないので話せなくて当然です。英語を話す必要があるならどこかで意識的に訓練する必要があります。6 年間英語を勉強したのに英語をろくに読めないとも言われます。それは単に語彙のせいです。英字新聞を読みたければそこで用いられる語になじむ必要がありますし、専門分野の論文を読みたければその分野の用語を知っておく必要があります。ともかく文法はわかるというのが日本の高校までの英語教育の目標なのです。グローバル化が叫ばれていても日本国内で仕事をする分にはまだ英語を話せることがさほど求められない状況で、かつ専門に特化しない普通科が主流の日本の高校制度においては、文法の習得を目標とすることにそれなりの合理性があると思います。その目標を達成できるように、このクラスでは英文法の総復習をして理解の確認をしています。

この目標からすると、最初の入り口が最も大変かもしれません。というのも日本語とは大きく異なる言語の規則を一から理解しなければならないからです。中１の初めに be 動詞を学習することになりますが、be 動詞がどのようなものであるかを理解できるのはずっと後になってのことです。この時期はアルファベットや単語の綴りに気をつけることと、辞書を引くことに慣れることを重視し、英語を学習する土台を築きたいと考えております。

(文責　浅野直樹)

『中学数学』(水曜４限)　担当　浅野直樹

このクラスでは新たに中１の生徒を迎え、現在は中１～中３の生徒４名で運営されています。異なる学年の生徒たちが同じ場にいると、それだけで思わぬ効果が現れたりします。

中学校では一年ごとに目に見えて高度な数学を習います。一学年上の先輩がやっていることを見るととても難しいことをしているように見えます。ポジティブに考えれば一年間しっかりと頑張ればそこまで行けるのだという励みになります。

先輩が直接教えてくれるということもあります。一年前に習ったばかりだということもあり、私の説明よりわかりやすいこともあるでしょう。極めて実践的なことを教えてくれることもあります。例えば、学校の定期テストでは教科書の章末問題をしっかりやっておくとよいといったような事柄です。同じ学年同士であっても、自分が苦労した問題を出題して解説し合ったり、別の中学校で先に定期テストが終わったときには練習としてその問題を貸してあげたりするという光景が見られました。

上の学年の生徒が一方的に教えるばかりではありません。前提知識を必要としない代わりに思考力が問われる問題では学年を超えて共通の土俵で勝負できます。同じ問題に対していろいろなアプローチがあります。基準はあくまでも数学的な正しさです。時には私も一参加者として、権威ではなく数学的な正しさに訴えて他の人を説得しようと試みます。

与えられた問題を何も考えずに解くのではなく、広い場面で応用できるような考える力を身に付けてもらいたいと思っているので、こうしたその場その場での相互作用は大歓迎です。上の学年の生徒が一方的に教えているように見えるときでも、教えている側の理解が深まるという効果があります。これからも本当の意味で共に学ぶ場を目指していきたいです。

(文責　浅野直樹)

『高校数学』(木曜４限)　担当　浅野直樹

今回は一つのことだけを言わせてください。それは本質を理解するということです。公式を丸暗記しても仕方ありません。直近の試験に対応できることはあっても長期的にはどうにもなりません。少しひねった問題にも太刀打ちできません。公式を丸暗記するのが苦行だとしたら、本質を理解することは喜びです。このクラスの受講生は、学校の物理の先生の同趣旨の言葉をきっかけにして、これらのことに気づいたようです。実際、微分積分を理解しようと努め、理解が深まるという喜びが得られました。

数学の本質を理解するためには、表面的な分野の違いや配当学年にこだわる意味はありません。例えば微分積分を理解するために一次関数の知識が必要になったら、それが中学の範囲であっても、そこまで戻って考えるだけです。数学の本質を理解することに熱中していれば余計なことは気にならなくなります。

(文責　浅野直樹)

『歴史入門』（水曜４限）　　担当　岸本廣大

この春学期から開講した新しいクラスである歴史入門（高校）では、高校生を主な対象とし、基本的な世界史・日本史の知識を整理しながらも、歴史学研究の新しい知見を紹介しています。また、各トピックについて私から質問をぶつけ、生徒さんに答えてもらうことで、単に暗記するだけの歴史ではない、考える歴史の勉強にも取り組んでいます。

いわゆる「歴史」は、小中学生の社会から高校生の世界史・日本史まで続く教科であり、国数英理と共に五教科とされるほど重要視されます。一方で、それらを単なる暗記科目とみなし、忌避してしまう人が多いのも事実です。歴史学を専門とする立場からすれば非常にもったいないことです。私が思うに、それは「なぜ歴史を学ぶのか」が理解されていないためです。そこで、日々のクラスの詳細はブログに譲り、ここでは初回で触れた「なぜ歴史を学ぶのか」について述べ、歴史入門の紹介に代えたいと思います。

初回のクラスでは、昨年末の「ジャスミン革命」に端を発する一連の出来事を例に、「現代社会を相対的にみる」という歴史を学ぶ一つの意義を示しました。「ジャスミン革命」は、アフリカ北岸のチュニジアで起こり、エジプトに飛び火、シリアやヨルダンなど近東にも影響を与え、ご存知のようにリビアではそれに端を発する内戦が現在も継続しています。加えて、ヨーロッパ諸国によるその内乱への干渉によって、これは地中海周辺のアフリカとヨーロッパ、近東という三つの異なる世界を巻き込んだ歴史的事件になりました。

しかし、歴史を紐解けば、それらの世界はもともと地中海世界という一つの世界であり、一時期はローマの下でひとつの国に含まれていました。つまり、三つの異世界という区分はなかったのです。寧ろ、古代において存在したのは、地中海世界と中東のペルシア世界という互いに対峙する二つの世界でした。地中海世界が現在のように分断された過程を詳細に語るには紙幅が足りませんが、7 世紀以降のイスラーム教の登場、そして 20 世紀の帝国列強による植民地化という歴史的事件が画期として挙げられます。

簡単にですが、以上の過去を踏まえると、西洋（キリスト教）とイスラーム、ヨーロッパとアジア、アフリカといった区分が越えがたい「ベルリンの壁」ではないことがわかるでしょう。確かに、古代と現代では状況が異なり、アナクロニズムは避けねばなりません。しかし、現代における区分が歴史的に形成された相対的なものであることを知っていれば、現代世界の区分に拘泥して排他的になることがいかに無意味か明らかでしょう。

中学生の頃、「歴史って何でやるの？」という同級生の発言は、当時歴史の勉強を無批判に享受していた私に大きな衝撃を与えました。正直、今ここでも、その質問に完璧に答えられたとは思っていません。それでも、今までの私の考えを伝えることで、歴史を学ぶ意義に疑問を感じてきた方に、何かしらの光を投げかけることができれば幸いです。

（文責　岸本廣大）

『調査研究入門』（金４限・隔週）　　担当　浅野直樹

このクラスは中学生以上を対象とした、物事を調べてまとめて発表するということを実践する場です。山の学校始まって以来の企画です。おそらく日本中を探してもこの種のクラスはめったにないのではないでしょうか。最近では日本の大学でこうした試みが徐々になされるようになってきたようです。

そういうわけでどのように進むかまったく予想することができませんでした。しかしそうした不安も受講生たちの表情を見ると吹き飛びました。初回にしてどのようなことを調べたいのかをはっきりと語ってくれたのです。

調べることが決まれば話が早いです。およそどのようなことを調べるにしても、そのことについての基本的な文献が存在するはずです。最初の数回はその基本書探しを行いました。それと同時に、百科事典などの辞書類を参考にするよう心がけました。辞書類の記述は一般に信頼できますし、用語の整理もできます。この段階で、コピーアンドペーストでレポートを提出する大学生を上回っていることは言うまでもありません。

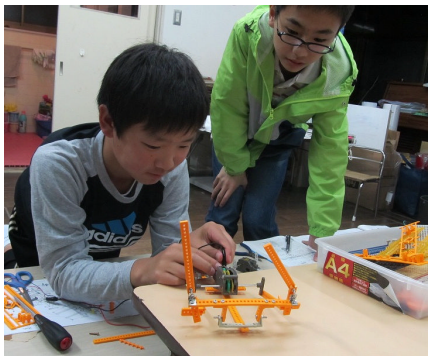
そして現在は調べたことを表現しようと試みているところです。春学期の終わりには何か一つの形にしてもらう予定です。

（文責　浅野直樹）

『ロボット工作』中学生（金３限／隔週）　担当 福西亮馬

『まだまだ、これから！』

このクラスでは市販のミュウロボ（PIC16F688）というキットを使って学んでいます。今学期から新しく１年生たちが入ってきて、最初の授業でさっそく本体を組み立ててもらいました。その 1 年生の「動いた！」という初めての歓声は、2 年生にとっては去年の自分たちを思い起こさせるものです。ぜひ先輩として彼らに色々と教えてあげてほしいと思います。

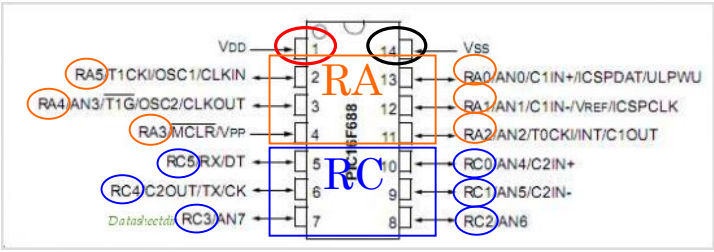


前学期は、触覚センサーと迷路脱出のプログラミングを勉強しましたが、今回の目標は、アームの取り付けです。アームには「掴む」「集める」「押し出す」など色々な動作が期待できますが、それをかなえるためのアイデアは、驚くほど多様です。また、どんなに単純なアームであっても、これを取り付けると、にわかにロボットらしくなって見えるから不思議です。

ところでミュウロボはモーターを三個まで動かすことができますが、そのうち二個は車輪（キャタピラ）用です。それなので、実際にフリーに使えるのは一個だけです。もし二個あれば左手と右手に取り付けるところですが、一個という点が、工夫のしどころです。そこで「リンク機構」という機械要素を勉強する必要が出てきます。
これについては「まねること」が先だと思うので、最初は全員、同じタイプのものをお手本通りに作ってもらっています。そしてだんだん分かってきたら、シャベルやクレーンといった、それぞれの仕様に進んでもらおうと考えています。

さて、1 年生から素朴な疑問として、「ロボット工作って、これをしたら、もう終わりですか？」という質問がありました。それに対して以下に、「ある意味これが理解できれば最後」という根本を、かいつまんで説明したいと思います（もちろん授業でも繰り返し説明します。ここには今後の方針として書き残しておきます）。

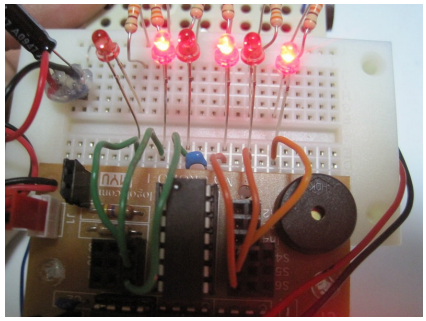
下の図は、ミュウロボに使われている PIC（ピック）16F688 というマイコンです。ピン 1（Vdd）が電源のプラス側（+2.5～5.5V）、ピン 14（Vss）がマイナス（0V）です。そこから取った電流が、マイコンの入出力に使われています。



残りのピンを見てみると、RA0~5、RC0～5 ときれいに分かれています。実際、RA と RC はそれぞれ一つずつの計算処理グループをなしています。そしてピン一つ一つは、それにかかる電圧を on、off にすることで「1、0」(bit)を表すことができ、RA（ないし RC）全部で、6 桁までの 2 進数を 1 つ表すことができます。これが「6bit マイコン」と言われるものの正体です。
そしてこの 2 進数の計算処理が、ロボットの振舞いにそのまま直結していることを理解すれば、工作の幅はぐんと広がります。

たとえば RC0 と RC1 を選んで、モーターの両側の端子とつなぎます（実際はモータードライバーを介します）。2 進数の 0 は 0V、1 は電源電圧なので、「0、1」とすれば正転に、「1、0」とすれば逆転に対応させることができます。これは電池を＋－つなぎかえるのと同じ作業です。しかしそれを手ではなく、ロボットはマイコンの中で 2 進数の計算でしているのです。

さらにその値を指定するのがパソコンから送るプログラムです。「前進」や「アーム正転」といったコマンドの正体は、010101 といった 2 進数だったのです。


（RC＝B'010101'の可視化）

そのことを表にまとめると、以下のようになります。

ピン	RC5	RC4	RC3	RC2	RC1	RC0	動作（計算結果）
2 進数	0	1	0	1	0	1	010101
10 進数	(32)	16	(8)	4	(2)	1	16+4+1=21
負荷	アーム(−)	アーム(+)	車輪左(−)	車輪左(+)	車輪右(−)	車輪右(+)	「前進」かつ「アーム正転」

（注：簡単のため、ミュウロボの実際の配列とは異なります）

この表は「マイコンからモーターへ」の出力についてですが、0、1 の関係を逆にすれば、「センサーからマイコンへ」の入力の理解にもなります。そしてこの表を理解してマイコンをフル活用すれば、もはやミュウロボを市販のお仕着せではなく、自己流に改造することができます。

「モーターは 3 個まで」「センサーは 4 個まで」という制約は、実は RC0～RC5 の 6 ピンがモーターに、RA0～RA3 の 4 ピンがセンサーにつながれているからです。そこでもし RA のピンが空いていれば、このデフォルトを変更して、モーターに回すことができます。逆にモーターは 3 つも使わないかもしれません。その場合は、RC のどれか 2 つのピンでセンサーを（独立に）2 つ増やすことができます。（ただしその場合の注意としては、プログラム作成ソフトのコマンドが対応していないので、プログラムには独自の工夫が必要です）。

さらに、センサーにつないでいるピンの状態を計測することで、センサーの感度を調整してより精密に使うことが可能となります。（RA0～3 の状態は 0000～1111 といった 4 桁の 2 進数で表され、10 進数に直すと 0～255 になります）。

またここからは発展ですが、電子工作の知識があれば、インバーター（74HC04）というロジック IC を使って、モーターを動かすためのマイコンのピン数を半分まで減らすことができます。その場合、仕様に応じて専用基板を自作してもいいかもしれません。そうなるといよいよ半田ごての出番です。そしてそうした経験を重ねれば、高校生ぐらいには自分で部品を調達して、モータードライバーから何から、ロボットを一から作り上げることも不可能ではなくなるでしょう。

このように、アームのリンク機構だけでなく、マイコンの入出力ピン、計測、プログラム、そして電子工作と、いくらでもステップアップすることができます。加えて、無線化という興味深いテーマも残されています。

従ってひとまず、ロボット工作は「まだまだ始まったばかりだ」と言えそうです。ぜひみなさん、「すごい」と思える高みまで一緒にたどり着きましょう！

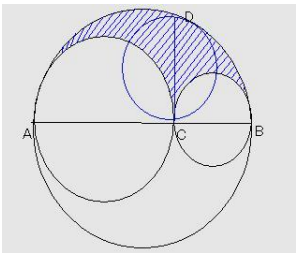
（文責 福西亮馬）

『ユークリッド幾何』中学生（金３限／隔週） 担当 福西亮馬

『本当にすごいものは、彼らの好奇心！』

今学期から新しく一年生の Hi 君が入ってきました。彼にはガイダンスの後、対頂角（『原論』1.15）、同位角（同 1.27）、錯角（同 1.27 の言いかえ）の命題を一つずつ証明してもらいました。去年の 1 年生たちもそうでしたが、最初はかなり苦労していました。ですが晴れて一つ目が証明できると、それを使って二つ目、三つ目と面白いように解けていくので、そこに幾何学の「味」を知ってもらえたようです。この間は、三角形の内角の和（1.32）を証明してくれました。そして休み時間の最後のいとまも惜しんで、「もう一つできるかもしれないし、やってみる」とまで言ってくれました。

今は２年生たちとは別々の課題をしてもらっていますが、いずれ合流して議論に加わることができるでしょう。その時が来るのが楽しみです。



（斜線部分がアルベロス（靴屋のナイフ）。線分 CD を直径とする円と面積が等しい）

さて２年生たちには、三平方の定理の応用で、『アルベロス』を紹介しました。これは「靴屋のナイフの問題」とも言われ、アルキメデスが考えたとも言われています。授業では左の図以外にはそれほど深くは立ち入りませんでしたが、後ろにはアンモナイトの殻を割ったような美しい図柄の定理が控えています。もしご興味のある方は、ぜひお調べになってみてください。

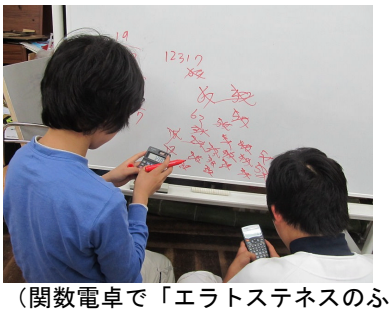
その後、少し目先を変え、数論（『原論』第 9 巻）に入りました。授業では「偶数－偶数＝偶数」というような、わりと簡単なものから証明してもらって

いて、まだそれほど感動があるというわけではありません。しかしある時、授業が終わってから、とても象徴的な展開がありました。

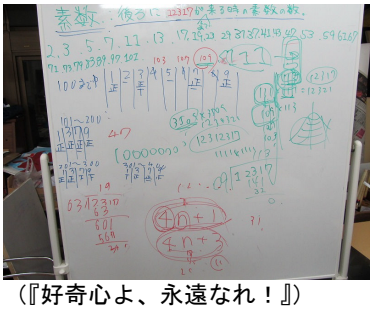
ユークリッド『原論』の命題 9.20 に、「素数は無限にある」という内容の命題があります。それは中学生には手に余る問題だったので、授業では伏せておいたのですが、そのことが生徒たちの興味をかえって引いたようでした。素数とは何かという話から、1 の位が 3 や 7 の素数が多いことや、下 2 けたが 17 の場合はどうかというのが、いつの間にか話題にのぼりました。

（分担して割り算する A 君と K 君）

（100 までの素数表を作成する Ha 君）


（関数電卓で「エラトステネスのふるい」を実行中）

（素数判定プログラムで、ますます盛り上がる三人）


（『好奇心よ、永遠なれ！』）

そこで A 君と K 君が、「下 2 桁が 17」の数は素数かどうかということを議論し始めました。するとおもむろに K 君が 12317 という無作為な数字をホワイトボードに書き記し、それが素数かどうかを調べたのでした。

2、3、5、7 では割り切れなかったので、さっそく「12317 は素数らしい」という予想が立てられました。そして 11、13…と割る数（素数）を大きくして続けていきます。ここで、100 までの素数を見つける必要が生じました。

すると隣にいた Ha 君が、二人の計算している間に 100 までの「素数表」を作成し始めたのでした。一方、ひたすら割り算を実行していた A 君が、割る数をどこまで調べ上げればよいか、その指標を欲していました。私もちょうど頃合だと思ったので、「エラトステネスのふるい」を紹介しました。その方法によると、$110^2 < 12317 < 111^2$ なので、素因数分解の対称性から、仮に 111 以上の数で割り切れた場合は 111 未満の数にも素因数のペアが見つかります。それなので、結局、111 までの素数で割り切れなければ、12317 は「素数」ということになります。そうなれば当初の「下 2 桁が 17 の数は素数」という予想がいよいよもっともらしくなります。

さて、K 君が関数電卓を持ってきてルート・キーを叩きはじめた頃、Ha 君の素数表が完成しました。これが貴重な鍵となりました。なぜなら、111 までの素数を調べればよいと分かっているので、そのリストにある素数であとはひたすら割っていけばいいからです。「もれがない」という点が重要でした。A 君と K 君の手に渡ったそのリストと、電卓の力のおかげで、研究が飛躍的に進みました。

そしてとうとう、12317 が割り切れる時が来たのでした。しかもそれは 109 という、「最後の最後で！」というドラマチックな偶然でした。それがちょっと信じられなかったので、電卓のディスプレイの 113 という表示をまじまじを見つめてから、もう一度自分たちの手計算でも確かめていました。確かに、$12317 = 109 \times 113$ でした。

この反例によって、下 2 桁が 17 の数は「素数とは限らない」ことが分かりました。しかし、三人にがっかりした様子は微塵もなく、一つの数が素数かどうかを判定することが、これほども大変であることに、「いい汗をかいた」と言わんばかりでした。

さて、それで終わりかと思いきや、その好奇心にはまだ続きがありました。「12312317 はどうかな？」と。その平方根は約 3509 です。ですので、それまでの大きさの素数（600 個以上）で割り算を実行すれば、晴れて「12312317 が素数かどうか」を知ることができます。しかしそんなことはしたくないのが普通です。しかもそれを知って一体何の得があるのでしょうか？…とたいていなら、ここでさじを投げてしまいそうなものです。しかし彼らの探究心とチームワークは、まさしく「飽くなきもの」でした。正直この展開には私も驚きました。

このあとも実はまだまだ続きがあるのですが、ここで割愛します。もしよければ、山の学校のブログに書いていますので、ご覧下さい。

最後に、三人が「素数判定」のプログラムで得た不思議な数でしめくくりたいと思います。

"19999308753827583973213 61 is prime！"

（文責 福西亮馬）

『経済学入門』（水曜 3:30～4:50）　担当　百木 漠

この春からまた経済学入門の授業（大人向けクラス）が復活しました。3月の「学びの夕べ」で、浅野先生や僕たちが主催している学生団体「京都アカデメイア」とのコラボ企画として「経済学の夕べ」を担当させて頂いたのですが、そのきっかけでUさんとKさんに「経済学入門」のクラスに申し込んで頂き、この4月からは3人で勉強することになりました。昨年はUさんとのマンツーマン授業だったのですが、3人で勉強していると（僕が一方的にふたりに教えるというのではなく、むしろ毎回3人でわいわいと議論しながら授業を進めている感じです）マンツーマン授業では見えなかった視点が新たに見えてきたりして、非常に充実した雰囲気で授業を行うことができています。

初回の授業では、今回の東日本大地震に関連して、震災によって日本経済がどのような影響を受け、今後の日本経済はどうなっていくのか、という内容で3人で議論をしました。僕が日経新聞などからいくつかの震災関連の記事を持ってきて、その内容について簡単に解説を行ない、その後、おふたりにそれぞれの記事についての感想や、そのニュースに関連して知っている知識などを話してもらいました。例えば、震災・原発事故を受けて農業・漁業などの第一次産業が大きなダメージを受けることが予想されるというニュースや、東北の工場が生産をストップしたことにより世界的な規模で部品不足が生じているというニュース、震災復興のための予算をどのように賄うべきなのかという記事、原発事故の影響が今後の日本経済や日本社会のあり方にどのような影響を及ぼすのかという記事、などなどです。UさんもKさんも毎回僕が知らない関連ニュースや経済に関する知識を教えてくれるので、僕自身も非常に勉強になっています。長年、研究・技術職で働かれてきたUさんの意見や、自営で働かれているKさんのビジネス知識は毎回参考になるものばかりです。

また先日は、民主党が打ち出した社会保障改革案（①社会保険のパートへの適用拡大、②社会保障と税の共通番号制、③幼保一元化）について議論しました。社会保険や年金の制度はどのようなものが最も望ましいのか、社会保障と税の共通番号制に問題はないのか、幼保一元化や子ども手当制度にはどのような問題点があるのか、などなど。社会保障については、自分たちが実際に税金を払い、直接にその恩恵を受けている事柄なので、自然と議論も盛り上がりました。財源を賄うとすればどのような方法がよいか（消費税？相続税？）、年金制度はどのような方式が望ましいのか、ベーシック・インカムの導入には賛成？反対？など様々な点に議論が発展して面白かったです。

毎回の授業では、最初の30分間で僕がピックアップしてきた経済関連のニュースについて議論し、残りの1時間でマクロ経済の基礎理論についての勉強（現在は貨幣市場理論）をしています。もしこの授業に関心を持たれた方がいらっしゃいましたら、ぜひ一度授業を体験参加してください。日本経済や世界経済の将来について、共に学び、共に議論する仲間を募集しています。

（文責　百木 漠）

『ラテン語初級文法』（木曜４限）　担当 山下大吾

今学期の当クラスは、お一方の受講生を迎えて開講いたしました。このクラスの特徴である、一学期三か月間でラテン語文法の基礎を固めるという目標のもと、ゴールを目指して毎週ゆっくり急げの歩みを進めております。教科書は岩波書店刊田中利光著『ラテン語初歩　改訂版』を用い、毎回4課のペースを崩さず、これまでに第三変化の項目を無事乗り越えることが出来ました。

受講生のOさんは、前回の『古典語の夕べ』に参加され受講を決意された由、講演を担当し

た一人として大変有難く思います。ラテン語の持つ普遍的な意義をよく理解されており、授業前にはこちらも嬉しくなるような話題でしばし盛り上がります。語形変化の多さにはやはり閉口されているようですが、勤務中も頭の中で変化表を繰り返しているという貴重なエピソードをご披露くださいました。ただし文字に関してはギリシア語と異なり馴染み深く、この点負担が少なく有難いとのご感想を頂きました。何気ないこのご指摘は、実は大事で意義深いものと思われます。

ローマ帝国というその後の西洋の潮流を決定づける国家を築き上げたラテン人は、元来その周囲をエトルリア人等の優勢な民族に囲まれた、イタリア半島の中の一弱小民族にすぎませんでした。それが今ではどうでしょう、英語やフランス語、ドイツ語など、言葉は違えど西欧の言語の文字体系はほとんどすべて、彼らラテン人が自らの言葉、すなわちラテン語を書き表すために考案した文字をその基礎にしています。体は違えど衣装は同じということになるでしょうか。

東洋の一国であるこの日本でも、Oさんの馴染み深いというご感想からも明らかなように、この文字を見ずに過ごす日など一日たりともないと言ってよいでしょう。さらには、今の私のようにコンピュータ等を使って文章を綴る場合、ローマ字変換でなければ自由にタイプ出来ない、つまり「ローマ字でなければ日本語が書けない」という事態が到来しているのです。考えると少し恐ろしいことなのかもしれませんが、これもウェルギリウスの『アエネーイス』にある言葉、imperium sine fine「際限のない支配権」の一つの顕現なのかと思うと、不思議と頷けるような気がいたします。

（文責　山下大吾）

『ラテン語初級講読A』（水曜４限）　　担当 山下大吾

キケローの対話篇『友情について』を読み進めてきた当クラスに、今学期は若きNさんが加わり、メンバーは開講以来継続受講されているお二方と私を加え合計四人となり、離れの机の四辺が程よく埋まりました。Nさん加入が良き刺激になったのでしょうか、上記お二方の読解力も回数を経るごとに向上し、充実した授業が展開されております。その成果は、今学期中に同対話篇をめでたく読了する目途がついたことに明瞭に現れているでしょう。受講生の皆様方の努力に拍手を贈りたく思います。来学期からは同じくキケローの『国家について』からの一節、『スキーピオーの夢』を読み進める予定です。

Quamquam a multis ipsa virtus contemnitur et venditatio quaedam atque ostentatio esse dicitur. 「徳でさえ多くの人から軽蔑されて、自己宣伝とか見せびらかしだと言われることがある」。86節のこの言葉は、結論に当たる27章100節の、徳を薦め礼賛する言葉を読むと少々意外な感じがしますが、要は「過ぎたるは猶及ばざるが如し」ということになるのでしょうか。ホラーティウスの詩行（『書簡詩集』1.6.15-16.）を思い起こさせ印象に残りました。

ある日の授業で、受講生のAさんが手ずから写されたテクストを朗読していた所、ある部分がすっかり抜け落ち、慌てて底本のテクストを見直すという機会がありました。傍らではHさんが、以前自ら体験された「事件」を目の当たりにし安心されたのか、その顔はにっこり微笑んでいます。

Aさんの為された行為は、古文書学上いわゆる homoeoteleuton に因るお墨付きの「誤り」であり、その点で西洋古典を学ぶ者として、その昔、今日我々の依拠する版の基礎となるテクストを丹精込めて書き写した（と同時に「誤り」を犯した）写字生と同列に並ぶことになります。語句の繰り返しを明らかに意図して書いたキケローに対してお詫び申し上げると同時に、自らの生々しい記憶と重ね合わせ、何かしら誇らしい感情を、受講生の皆様と共有する貴重な授業となりました。

（文責　山下大吾）

『ラテン語初級講読 B』（木曜 2:10〜3:30）　担当 山下大吾

今学期から開講された当クラスでは、キケローの哲学的対話篇『老年について』を読み進めています。受講生は初級文法クラスから継続受講されるCさんお一方、昼下がりの穏やかな離れの間で、毎週楽しくも真剣な授業が行われております。

Cさんは初級文法を終えていよいよ原典に取り組まれることとなりましたが、これまで練習問題などで見慣れていた規模と比べ格段に長い文章に直面し少しく当惑されたようです。ある程度のまとまりは正しく理解されていますが、そのまとまりをさらに大きな規模で、論理的に整合性のある「文」としてまとめる段階―すなわち syntax、「しっかりまとめること」―で今のところ足踏みされています。しかしケーベル先生も認めているように、本来ラテン語のシンタックスは非常に優れたものですので、ラテン語散文の鑑といわれるキケローの文章から、一日も早くその美しさを味わって頂きたいと願っております。

その授業の初回時、「まるでほろ酔い気分で書いているようですね」とCさんがふと意外な感想を口にされました。この対話篇の冒頭、エンニウスの詩行を基にした、キケロー自身のアッティクスに捧げる献辞にある言葉を目にされてのことです。

該当箇所は確かに陽気な雰囲気に満ち、アッティクスに対し「ご褒美」をねだるなど、気心の知れた友人間ならではの気安さが感じられます。しかしながら当時のキケローは、直後に「昨今の情勢に激しく動揺」していると自ら打ち明けるほど、丁度晩年のトロツキーのように、実際には政敵アントーニウスからの刺客の襲撃に対し絶えず身構えざるを得ないという、文字通り一寸先は闇の非常に危険な立場に位置していました。水で割った芳しい一杯のワインに身を任せ、つかの間心労を紛らせつつ筆を執るキケローの姿を想像するのも、それほど見当違いなものではないのかもしれません。

（文責　山下大吾）

『ラテン語初級講読Ｃ』（金曜４限）　担当 前川 裕（ゆたか）

今学期も引き続きセネカ「ルキリウスへの手紙」を読んでいます。受講生お二人はもう随分とラテン語に慣れていらっしゃるので、ほとんど滞りなく読み進めています。セネカはやや文法的な破格が多いため、時には判断に迷うところがありますが、幾つかの読みの可能性を残しつつ先に進んでいます。

セネカの言葉は現代においても鮮明で、まるで私たちに語りかけているかのように感じる内容もあります。人間はそれだけ変わっていない、ということでしょうか。基本的には「心を平静に保つこと」を呼びかけるのですが、さまざまな場面や事例においてその具体例が述べられます。例えば第 30 書簡では、死を不必要に恐れる必要は無い、と主張されます。常に死が近くにあることを意識することが大事だという意見は、中世思想にもつながるものかもしれません。

余った授業時間については、おまけの話をしています。最近はラテン語記事のホームページ Ephemeris から、最新ニュースのラテン語版を読んだりしています。英語学習で、既に日本語で知っている内容を英字新聞で読むことが勧められますが、ラテン語学習でも同じことが可能となっています。時事用語のラテン語訳など、古典とはまた違った切り口でのラテン語を楽しんでいます。（Ephemeris はグーグル検索すると見つかります。興味のある方はご参照ください）

次学期も引き続きセネカの予定です。初級文法修了程度(独学でも構いません)でご参加できますので、ぜひご連絡ください。

（文責　前川 裕）

『ラテン語入門・中級講読』（月４・金４）　担当 広川直幸

入門の授業では，Hans H. Ørberg の *Lingua Latina I: Familia Romana* を教科書にして，ラテン語の基礎を学んでいる．現在，３４課まで進んでおり，今学期で全３５課を学び終える．独特の教科書を選んだこともあり，開始当初は，一通り学び終えるのにどれだけの時間が必要なのか皆目見当が付かなかった．それでも，大学の授業のように年度に縛られているわけではないので，余り急がずに進めようと開き直って授業を行ったところ，ちょうど２年で終えることができた．今になって思うに，本当の意味での基礎を築くには，少なくとも，これぐらいの時間は必要なのかもしれない．

この授業が節目を迎えることができたのは，何よりも受講生に恵まれたおかげである．確かに，*Lingua Latina* はその面白さ他の追随を許さぬ教科書ではあるが，そうではあっても，２年間，地道に学び続けるということは誰にでもできることではない．ここに感謝の意を表したい．

秋学期からは，シリーズの後半である *Lingua Latina II: Roma aeterna* を教科書にして授業を行う．

中級講読では，ウェルギリウスの『農耕詩』を読んでいる．ようやく４巻後半部「アリスタイオスの物語」に辿り着くことができた．読了は来学期の途中になるであろう．『農耕詩』を読み終えたら，すぐに『アイネーイス』を読み始める予定である．

（文責　広川直幸）

『ギリシャ語入門A・B』（火３・土 2:00～5:00（隔週））
『ギリシャ語初級・中級講読』（火４・金４）　担当 広川直幸

今学期から始まった入門 A では，*Thrasymachus* を教科書として用い，一年かけて古典ギリシャ語の基礎を学ぶ予定である．この教科書は，ギリシャ神話に基づいた愉快なテクストを読んでから，重要文法事項を整理し，最後に練習問題で理解度を確認するという体裁をとっている．まず文法規則を学び，それを確認するためだけの無味乾燥な短文の羅列を訳読するという，従来ありがちな教科書とは趣を異にするものであり，慣れれば楽しく学習を進めることができるはずである．だが，その楽しみも，学ぶべきことを着実に学んで行かなければ得られない．学ぶべきこととは，要するに語彙とパラダイムである．語彙は，テクストの文脈の中で，どのように使われているのかを意識しながら覚えるのがよい．パラダイムに関しては，教科書に現れるものは，すべて完全に暗記する必要がある．当たり前のことであるが，復習の上に復習を重ね，これらの壁を乗り越えて欲しい．

同じく今学期から始まった入門 B では，*First Greek Book* を一年かけて終わらせる予定である．伝統的な文法訳読方式による教科書ではあるが，短文訳読をさせるだけでなく，早い段階からある程度のまとまりのある文章を読ませることが，日本で出版されている同種の教科書とは異なる特長である．二週に一度の授業なので，各自，自分に合ったスケジュールを立てて，予習・復習に励んでいただきたい．

初級講読では，プラトーンの『ソークラテースの弁明』を読了した．初級文法を学び終えてすぐに，プラトーンの初期作品の中でも易しいとは言えない『弁明』に取り組み，最後まで読み切った受講生を称えたいと思う．初めは相当苦労したようであるが，解説を聞き逃さず，着実に読解力を向上させて行く様を見守るのは，教える側の私にとっても喜びであった．現在は，『新約聖書』の「マタイによる福音書」を読んでいる．古典期のギリシャ語とは少し異なるギリシャ語で書かれているので，そのあたりの解説に重点を置くつもりである．

中級講読では，トゥーキューディデースを読んでいる．この原稿を書いている時点で，１巻の４３節まで進んだ．難解である．とりわけ，弁論の部分には，規範文法の観点からすると，破綻していると言わざるを得ない個所がある．この授業では，そのような個所を読む際，大意が取れればよしとするのではなく，何故そのような表現になっているのかを，できるだけ粘り強く考えるようにしている．

（文責　広川直幸）

『英語一般』（月曜 14:10～15:30）　担当　浅野直樹

（秋学期から木曜 14:10～15:30 に移動）

この一般英語クラスは 3 期目に入りました。最初は長らく英語に触れていないという状況からだったのですが、毎回宿題を出していましたので、一年近く英語に触れ続けたことになります。もともと英語は得意なほうだったということで当初から中学卒業レベルの知識はありました（ここで言う中学卒業レベルとは最低限の文法事項が理解できている状態であり、それだけでも結構な水準です）。

1 期目は記憶を呼び覚まそうと文法事項の説明を一通りしました。同時に日常的な素材の英文を毎回 5 つずつ読んできてもらいました。この時期はまだ英文の構造がどうなっているのかわからないという質問をたびたびされたものです。

2 期目は文法事項の定着を目的として英文和訳と和文英訳を毎回宿題に出しました。結構な分量だったと思います。1 対 1 の授業だったので、答案を一つずつ検討し、誤りを指摘したり別の表現を紹介したりしました。日常素材の英文を読むことは引き続き行い、特に語源に注目して語彙を増やすことに注力しました。2 期目の最後のほうともなると語源的な考え方のコツをつかまれたようでした。

ここまでで高校卒業レベル（辞書さえあればおよそどのような英文でも読める、最低限意味の通じる英語を書くことができる）の力はついたと感じました。ここまでは何をするにしても共通の土台になるでしょう。ここからは興味や必要に応じて内容が変わります。論文や新聞などが読めるようにさらに難しい英文に取り組むという路線もありますが、日常的な意思疎通を行うことを重視したいということでしたので、会話の活動を取り入れることにしました。

ということで 3 期目のこの春学期の報告に移ります。これまでに日常的な英文であれば構造がわからないということはなくなり、簡単な一文の英語であればしっかりと書くことができるようになっていました。ここまで来ると、いざとなれば筆談か電子メールといった形でなら確実に意思疎通を図ることができるという安心感があります。

もちろん会話ができるに越したことはありません。そのほうが早いのですから。早いということは瞬時に表現が出てこなければならないということです。助動詞を用いた表現や、基本的な疑問文は考えなくても口に出るくらいになりたいものです。語彙にしても考えてわかるというよりも聞いてすぐに意味がわかるという段階に至らないと会話は難しいです。もう一つにはわかりやすく話したり聞いたりするという技術があります。first, second, third といった表現を用いたり、内容を明確にするような確認の問いかけをしたりすることです。今学期はこうした実践的なテクニックにも注意を払っています。

（文責　浅野直樹）

『イタリア語講読』（月曜 18:40～20:00）　担当　柱本元彦

今学期はルイジ・ピランデッロの短編をいくつか読んでいます。ピランデッロは二十世紀初頭に活躍した劇作家・小説家で、1934 年にノーベル文学賞を受賞しました。彼の作品はすべて、＜自分という存在のあいまいさ・もろさ・空虚さ＞という同一主題の変奏と言えます。なんだ結局どれもこれも同じではないかと、むかし学生の頃に読んだときには少し物足りなく感じられたものです。でも実際のところなんと大きなテーマでしょう。それが数かぎりない状況のなかで、真正面から追究されるわけです。そのうえ、とりわけ彼の戯曲は、野性的な力強さ（残酷さ）をもっていました。しばらく前まで「ピランデッロ的に不条理な・・・」という科白をよく目にしたものです。＜不条理＞という言葉は日本ではカミュとフランス実存主義によって普及したようですが、ヨーロッパではまずピランデッロが有名でした（カフカの＜発見＞は第二次大戦後ですから）。あらためて読んでみるとやはり素晴らしい、本物の文学だなあと納得させられます。文章は、当時のシチリア的表現が少しあることを除けば、現在のイタリア語とまったく同じ、比較的平易なはなしことばです。＜体言止め＞を多用したセンテンスは短くドライなもので、読書はまるで映画を見ているような視点の移動をともないます。映画と言えば、1985 年公開のタヴィアーニ兄弟監督の映画、『カオス・シチリア物語』がピランデッロの短編を原作にしていました。プロローグとエピローグがとりわけ印象的でしたが、もちろん本編も美しく、お薦めです。

（文責　柱本元彦）

『フランス語入門』（木曜 10:40～12:00）　担当 武田宙也（ひろなり）

＊秋学期から『フランス語講読』開講（土曜 9:10～12:00 隔週予定）

この春からフランス語クラスを担当させていただくことになりました。現在このクラスでは、文法を中心にしてフランス語の基礎を学んでいます。こちらは去年の秋から開講したクラスですが、最近では扱う文法事項もやや複雑なものが増えてきて、生徒さんとも、「ややこしいですねえ」と毎回苦笑しあいながら進めています。これはフランス語に限ったことではありませんが、外国語の文法規則には、はじめて接するときには、たじろぐくらい入り組んだ印象を受けるものがあります。しかしそれら「複雑な」文法は、少数のいわゆる「書き言葉」に特有のものを除けば、実際には日常会話においても頻繁に用いられる、「普通の」ものです。それだけに、こうした事項は、ある言語に少しでも親しもうと思えば、確実に覚えておくことが求められるものでもあります。

さてそれでは、この外国語学習の最初の壁をどのように乗り越えたらよいでしょうか。一方では、とにかく努力によってすべてを覚え尽くすという方法があります。これはある意味で「正攻法」ですが、もちろんそれ相応の忍耐力を要しますし、とくに初学者の場合、毎回次々に現れる新たな文法事項を一つ残らず記憶に留めようとすることは、相当なプレッシャーともなるでしょう。他方で、そうした丸暗記に限界を感じる場合には、初見での記憶にはあまり神経質にならず、その後の「実践」の中で、いわば「ゆるやかな習得」を目指すという方法もあります。というのも、文法を一通り終えた後には、読書やオーラル・コミュニケーションを通じて実際のフランス語に関わっていくことになりますが、そうした中で、最初に習った文法事項には幾度となく立ち返る必要が出てくるからです。その際にとりわけ重要なことは、いちいち文法をチェックすることを面倒がらないことです。このこまめな文法チェックにより、以前なんとなく覚えておいたことの生きた意味を感得することができ、さらにはそれを記憶に定着させることができるでしょう。このように、実際の言語使用という「実践」の中で基本に立ち返る機会をおろそかにしないことにより、はじめはとんでもなく複雑に思えた文法事項も無理なく消化できるでしょうし、さらにはそれらを、まさに「生きたもの」として使用できるようにもなるのではないでしょうか。

もちろん、先に述べた二つの方法ははっきりと分けられるものではありませんし、前者の方法をとったからといって復習の必要がなくなる訳ではまったくありません。しかしここでは、機械的な暗記よりもむしろ、ひとつの文法事項がその言語全体の中で持つ意味に注意を払うことによる、「復習を中心とした外国語学習」の効用についてお話をさせていただきました。

（文責　武田宙也）

――「イベント」――

『将棋道場』（月曜 16:00～18:00）　担当 百木 漠

おかげさまで将棋道場は二年目に突入しました。最近の将棋道場では、大盤を使って簡単な定跡講座を行っています。そろそろ子どもたちにも簡単な定跡や手筋を覚えてほしいなと考えてのことです。以前の山びこ通信で、強くなるためのコツはとにかくたくさんの対局をこなすことだと書きましたが、強くなるためのふたつめのコツは多くの定跡や手筋を覚えることです。定跡や手筋は、将棋の型（かた）に当たるもので、この形ならこう指す、相手がこういう指し方をしてきたらこう返す、という風に将棋の指し方をパターン化したものです。定跡や手筋をたくさん覚えていればいるほど、様々な場面に対応しやすくなります。将棋道場でも、棒銀や中飛車などの定跡を使う子どもたちが増えてきたようで、子どもたちが上達している様子を見てとることができます。

最近の将棋道場では、今年から将棋道場に参加してくれたRiくんが台風の目になっています。前回の将棋道場まで負けなしで10連勝！昇級がかかった対局でも、亮馬先生に6枚落ちと8枚落ちで勝利し、文句なしに3級から2級へと昇進しました。5月の将棋道場で僕と6枚落ちで指し、なんとか僕が1局勝って初黒星をつけることができましたが、その後続けて指した対局（同じく6枚落ち）では僕のほうが負けて、すぐに1勝1敗に戻されてしまいました。Riくんは将棋を始めてまだ1年もたっていないとのことですが、驚くべき強さです。できれば元将棋道場チャンピオンのGeくんと新チャンピオンのRiくんの対戦を見てみたいのですが、Geくんは最近忙しくてなかなか将棋道場には顔を出せないでいるようです。いつか新旧チャンピオンどうしの対戦が見られるかなと期待しています。

去年の将棋道場からずっと参加し続けてくれているのはKaくんやKoくんですが、前々回からはKaくんの

妹のYuちゃんとKoくんの妹のKoちゃんも将棋道場に参加してくれるようになりました。ふたりともまだ駒の動かし方を覚えたばかりですが、2回目の参加ですでにサマになる勝負を展開してくれていました。時々、それぞれのお兄ちゃんに教えてもらいながら指している様子が傍から見ていて微笑ましいです。将棋を覚えたばかりの頃は、指し方のコツが分からず、なかなか勝負が終わらないので、退屈してしまう子も多いのですが、YuちゃんとKoちゃんが戸惑いながらも最後までちゃんと指してくれるのは、真剣勝負をしているお兄ちゃんたちの姿を見ている影響が大きいのかなと思ったりもします。

今年に入って続けて参加し続けてくれているSoくんやMiくんは毎回元気に将棋をさしてくれているものの、最近少し伸び悩んでいるようにも見えます。将棋は実力がどんどん伸びているうちはそれが面白くて集中できるのですが、実力が伸び悩むと集中力が続かなかったり対局に飽きたりしてしまうものです。このふたりの実力を引き上げて、さらに将棋の面白さを知ってもらうにはどうすればいいかな、と考え中です。まだまだ試行錯誤が続きますが、子どもたちに将棋の奥深さを知ってもらえるように今後も将棋道場を盛り上げていきたいと思います。

（文責　百木 漠）

●将棋道場

7月１１日（月）／8月２２日（月）　16:00～18:00

＊８月は「トーナメント大会」を実施します。

※フリーの対局スペースを設けております。
初心者の方も経験者の方も安心してご参加下さい。

対象：**小学生**
場所：山の学校教室
座主：百木漠

※事前にお申し込み下さい。

――Aemulatio「創造的模倣」の exemplum「模範」としてのラテン語とその継承――

山の学校古典語講師　山下大吾

以下の文章は、私が先の『ラテン語の夕べ』で行った講演、「ケーベル先生と古典―"You must read Latin at least."の意味」(http://www.kitashirakawa.jp/yama-no-gakko/?p=1309) の最終部を基にして作成したものです。上記アドレスに当日の模様と配布した資料のリンクがありますので、併せてご覧頂ければ幸いです。

ギリシア語やラテン語、また両言語で書かれた西洋古典の作品が、様々なヨーロッパ的現象の基礎を担うものであることはこれまでに幾度となく指摘されており、もはや常識と言ってよいものでしょう。私はそれに加えて、特にラテン語ラテン文学の持つ価値を、すなわちヨーロッパのみならず、我々日本人を含めたあらゆる人間に等しく響きあうものを、物事を真摯に学ぼうとするものであれば誰にでも当てはまる、今一つの普遍的な価値をこの箇所でとりあげました。

原稿作成に際し、山の学校の同僚である福西亮馬先生のブログ「Hinemos amo!」(http://d.hatena.ne.jp/nisuseteuryalus2/) に掲載された文章を参考にいたしました。記して感謝申し上げます。先生のブログも是非ご覧ください。

最後に、この我々が、ギリシアやラテンの古典を読む意義、分けてもラテン語を学ぶ意義について、ケーベル先生が一番好きなラテン詩人であったホラーティウスの言葉を基に考えてみたいと思います。

世に、傑作と言われる作品は数多く存在します。ケーベル先生も、その著作の中で数多く名前を挙げておりますが、それでなくてどうして、ゲーテやシラー、バイロンやシェークスピア、モリエールやダンテ、そしてプーシキンやチェーホフといった各国文学の傑作が存在し、またそれらに我々が触れて、それらを読んで、感銘を受け、感動しないといったようなことがどうして、ありうるでしょうか。

しかしながら、それら作品がひとたび「古典」と言われる所以は、それら作品の持つ内容、価値、質というようなものが、西洋古典の持つ価値なりと匹敵し、あるいは凌駕するものであると、もしくは、西洋古典の作品がヨーロッパの土壌で果たした役割を、その各国文学の土壌で果たした、あるいは広く世界的な規模で果たしたと認められた時にはじめて、古典、opera classica と呼ばれているのです。「第一級の作品」ということになります。

ということは、意識的にしろ、無意識的にしろ、また規模の差はあれ、それら各国文学の作品というものは、西洋古典の作品に「並び追いつこう」と、「挑もう」と、そういう動きの結果、先程申し上げたような作家の諸作品が生まれていると言ってもいいかもしれません。

世界文学全集という名の出版物が数多く存在します。みなさまのご家庭にも一セットあるのではないでしょうか。それらの背文字から訴えかけてくる作品名は、それらの苦闘の歴史、そのドラマの歴史であると言ってもいいかもしれません。ただしその世界文学全集の中で、肝心の西洋古典の作品が占める割合が少ないというのは、やはり欠点と言えるかもしれません。しかしその欠点もいずれ是正されていくことでしょう。

さてここで、今一度我々は古典の世界を振り返ってみることにいたしましょう。すると、そこには今申し上げたような動きを自ら体現しているような言葉、そして文学があることに気付かされるはずです。そうです、それが、ラテン語です。

紀元前 146 年、北アフリカの都市カルターゴーを徹底的に破壊し尽くした後、ローマ軍はその同じ年ですが、ギリシアで最後の抵抗を行っていたコリントスの町を、これまた徹底的に破壊し尽くして、ギリシアを制圧いたしました。と同時にカルターゴーも制圧しておりますので、中部地中海の覇権を握り、後のローマ帝国につながる世界帝国の建国へと突き進んでいくことになります。

ところが、そのローマ人たちは、一方の町カルターゴーではついぞ経験しなかったような体験を、ギリシアで体験することになります。すなわち、彼らは征服したはずのギリシアに、心を、魂を囚われてしまったのです。

ホラーティウスは、その様をこのように述べております。

> Graecia capta ferum victorem cepit et artes
> intulit agresti Latio
>
> ホラーティウス『書簡詩集』2.1.156-157.
>
> 捕われたギリシアは荒々しい勝者を捕らえた、さらに諸々の術を田野たるラティウムにもたらしたのだ。

とあります。ferus、「荒々しい」と訳しましたが、「野蛮な」とか「無骨な」というような非常に悪い意味であります。さらにその故地である、故郷であるラティウムに対して agrestis、「田野」「畑」――agriculture の前の agri- と語源的に繋がるものです――「田野の」という形容詞を使っております。

すなわちホラーティウスは、自分たちが昔田舎者だった、何もなかったのだ、ただ力だけが強い荒くれ者だったということを認めているわけです。

実際彼らローマ人の前には、ギリシアの数多くの天才たちが群居していました。ことを文学の分野だけに限ってみましょう。その奔放と言ってもいい詩的想像力で、またその緻密な構成、と同時に大洋のような規模において、我々を魅了してやまない、ホメーロスの『イーリアス』『オデュッセイアー』という両叙事詩。

これでもか、これでもかというような議論の積み重ね、ディアレクティケーで、我々をあくなきイデアへの探求へと誘う、プラトーンの『哲学』。

人間の運命のはかなさ、過酷さ、それと同時に、その運命にあえて挑もうとする人間の力強さを、この上ない最高の形で我々に示してくれる、アイスキュロス、ソポクレース、エウリーピデースの『悲劇』。

そのほか、ヘーロドトス、トゥーキューディデースの『歴史』、アリストパネース、メナンドロスの『喜劇』、デーモステネース、イソクラテースの『弁論』など、あらゆる分野の、あらゆる天才たちが、ギリシアには群れを成していたのです。月並な比喩になりますが、まさしく雷に打たれたような衝撃だったのではないかと思います。

さて、それを前にして、彼らローマ人たちはどのような行動に出たのでしょうか。「おれたちは勝者だ、荒くれ者でいいじゃないか」「実力で、もう世界帝国の建国に邁進して行けばいいのだ」――実際そのようになるのですが、それももちろん真実ですけれども――これはとても企て及ばぬと、尻をはしょって逃げたか…？　そうではありませんでした。彼らはあえて、ギリシアの天才たちに、追いつき、追い越そう、「張り合う」という行動に打って出たのです。本稿の表題に掲げたアエムラーティオー（aemulatio）という行動になります。

日本における西洋古典学の碩学の一人、岡道男先生はこれに「創造的模倣」という訳語を当てております。ちなみに -io で終わるラテン語の動詞由来の名詞には、ある本によると、その行為の結果というよりは、その行為そのものの過程を意味する場合が多い、という指摘があります。すなわちその行為を「絶えず行う」という意味が込められています。この「張り合う」という行為を、ローマ人たちは始めたわけです。

その過程に対しての励ましの言葉、激励の言葉として、同じホラーティウスは次のように語りかけます。

vos exemplaria Graeca
nocturna versate manu, versate diurna.
ホラーティウス『詩論』 268-269.
あなたがたは、夜であれ昼であれギリシアの手本を手にとって学ぶように。　（岩波文庫岡訳）

とにかくギリシアの手本をもってあなた方は学びなさい、と言っております。彼自身学んだ成果として、2行目をキアスムス（chiasmus）の美で表現しています。1世紀から2世紀にかけて活躍した文人、小プリニウスがものした『書簡』にも、以下のような類似した言葉が見出されます。

imitatione optimorum similia inveniendi facultas paratur.
小プリニウス『書簡集』7.9.2.
最高の作家の模倣によって類似の文章を創作する能力が養われます。（講談社学術文庫国原訳）

と、はっきり述べております。「最高の作家」にギリシアの先達が含まれることは言を俟ちません。このような努力を彼らは営々として積み重ねていったわけです。

すると同じホラーティスは、次のように歌いました。

Exegi monumentum aere perennius
regalique situ pyramidum altius.
ホラーティウス『詩集』3.30.1-2.
私は打ち建てた、青銅より永く耐える記念碑を、王の朽ちゆくピラミッドより高きものを。

と歌いました。高らかに宣言しております。続けますが、

dicar, qua violens obstrepit Aufidus
et qua pauper aquae Daunus agrestium
regnavit populorum, ex humili potens
princeps Aeolium carmen ad Italos
deduxisse modos.
ホラーティウス『詩集』3.30.10-14.
私は言われるであろう、アウフィドゥスの流れが激しく音を立てるところ、また水に乏しいダウヌスが田野の民を治めたところで、貧しき身より、力強くも、初めてアイオリスの詩歌をイータリアの調べに移し終えた者と。

アイオリスの詩歌というのはギリシアの詩歌のことを指します。

この carmina、『詩集』の 3 巻の最後に当たる歌になりますが、彼はここで、carmina の中において、「ギリシアの韻律を完全に移し終えた」「ギリシアにとうとう並んだのだ」という意識のもとに、このような宣言を高らかに歌い上げたわけです。

さらに彼は解放奴隷の子でした。その意も込めてでしょうか、下から3行目に、ex humili とあります。「貧しき身より」というような言葉も見出せます。さらに注目すべきは、その上の行で、自分の故地のことについて、先ほど『書簡詩集』で出てきた、ラティウムに冠していた同じ形容詞、agrestis という形容詞を、自分の故地の人々について、また使っております。

すなわち「自分は何もなかったのだ」「田舎者がとうとうここまでやり終えたのだ」「ギリシアに並んだのだ」という意識のもとに、ホラーティウスはこの詩を記したのです。

さて、それから1800余年の後、ある北国の詩人が、その悲劇的な決闘に倒れる前年、自身の文学活動を顧みて、このホラーティウスの詩集の冒頭 Exegi monumentum を題辞に掲げて、彼の遺言と言ってもいい詩をしたため、この世を去りました。それがロシアの詩人プーシキンです。

Я памятник себе воздвиг нерукотворный

という句で始まる詩です。「私は自らに人技ならぬ記念碑を打ち建てた」という言葉になります。

彼もまた、自らの詩業を顧みて、「私はホラーティウスの歌う、青銅より永く耐えるものに、朽ちゆくピラミッドより高きものに匹敵する詩業を成し遂げたのだ」という意識のもとに、一人祝福して、高らかに歌い上げたわけです。

同時代――1837年に彼は亡くなりましたが――の人々は恐らく鼻白んだかもしれません。しかし今度は、そのプーシキンをエクセンプルム（exemplum）として、模範として、「aemulatio の模範」として、レールモントフ、ゴーゴリ、トゥルゲーネフ、ドストエフスキイ、トルストイ、チェーホフというおなじみの文豪が堰を切ったように現れることになります。そして彼らの作品は、本国のロシアのみならず、世界中で、日本を含めた世界中で愛され、読まれ、研究され続けているのです。

話題をロシア一国に限って申し上げましたが、ヨーロッパすべての国において同じような動きが、ドラマが、繰り広げられていることは言を俟ちません。むしろロシアはそれが一番少ない地域と言っていいでしょう。

さてここで、我々は一番最初に戻ってみることにいたしましょう。その「創造的模倣」の「模範」たるものは、本来どういうものであったか。それは、ferus であり、agrestis であった。荒くれ者であり田舎者だった。何もなかったものが、ギリシアに並び、さらには後世に影響を与えうるものになった、というドラマが見られるわけです。

すなわち、これは「何かを真剣に学ぼうとする者」にとって――最初に何かを学ぶ際は何もその知識がないわけですから、そこから我々はスタートするわけです――ラテン語はその範とすべき姿勢を、身をもって示しているのではないでしょうか。何かを学ぶ際にラテン語は模範となり、そして好伴侶たりうると言えると思います。

さらにこれは、極言になるかもしれませんが、世界中のあらゆる言葉が「ラテン語になれる」ということを、他ならぬラテン語自身が、その身を通して我々に示してくれている、と言うことができるのではないでしょうか。

"You must read Latin at least."

この言葉をケーベル先生が西田幾多郎に対してものした時、このような意味を込めて言ったかどうか定かではありません。しかし今日我々の目で、このような巨視的な意味で、観点で捉え直していいのではないかと考えています。

"You must read Latin at least."

「ラテン語を学べば、必ず、得るところがある」と。

（文責　山下大吾）

学校法人北白川学園　北白川幼稚園・山の学校　〒606-8273 京都市左京区北白川山ノ元町 41
電話 781-3215　FAX 781-6073（山の学校・幼稚園共通）　電子メール taro@kitashirakawa.jp